

ZENBI

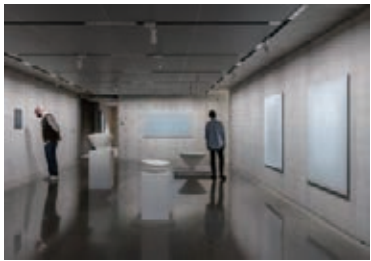
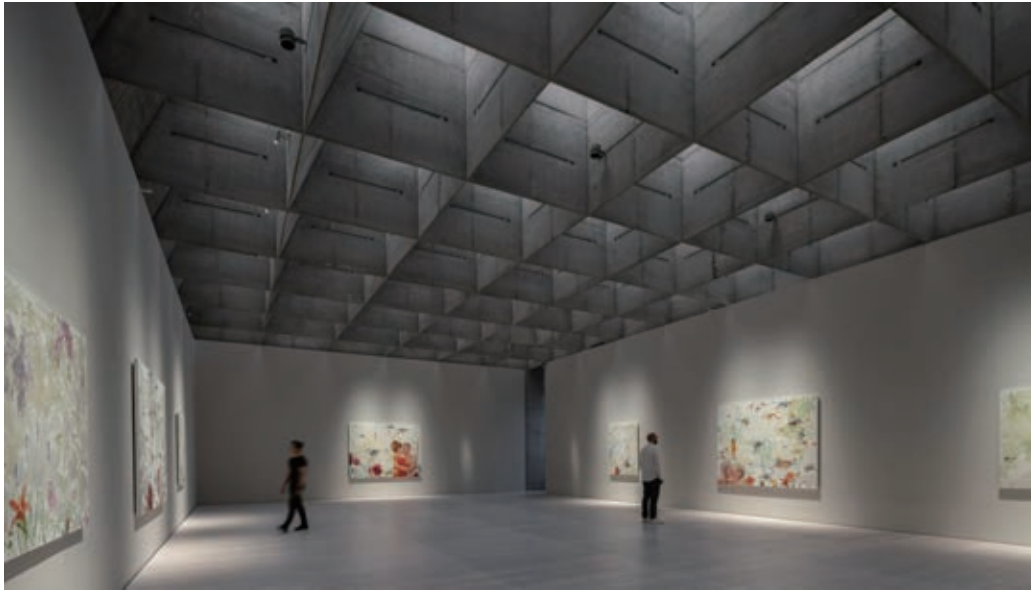
全国美術館会議機関誌

February 2025 [Vol.27]

Feb. 2025

ERCO, the Light Factory. Architectural lighting

ドイツのエルコ社(ERCO)は、LED技術を用いた建築用照明器具の国際的リーディングカンパニーです。1934年に設立され、1960年代にはヨーロッパにおける建築照明のパイオニアとなりました。現在、世界約55カ国に営業拠点およびパートナーネットワークがあり、約1,000名のERCOスタッフが、持続可能な照明器具の開発と発展に取り組んでいます。



Optec - あらゆる空間に対応するスポットライト

オブテック(Optec)は、どのような用途にも対応します。さまざまな器具サイズと、バリエーション豊かな配光の組み合わせは、ハイコントラストのアクセント照明から展示物への投光照明、壁面をムラなく均一に照射したり、印象的な効果をもたらす鋭いビーム照射も可能とし、美術館や博物館、ギャラリー等の照明設計に最も適したスポットライトです。Optecなら、照明のあらゆるニーズへの対応が可能です。革新的な光学設計により、効率性と快適性を兼ね備えています。灯体と電源ボックスが分離した器具のデザインは、完璧で優れた熱管理システムと性能を確保すると同時に、直方体と円筒の組み合わせがシンプルかつコンパクトでクラシックな視覚的印象を作り出しています。

Light & Licht

ERCO リプレゼンタティブ パートナー
ライトアンドリヒト株式会社

〒105-0014 東京都港区芝2-5-10
Tel.: 03-5418-8230(代表)
E-mail: info.jp@lightandlicht.com



Design and application:
www.erco.com/optec

QRコードよりOptec
スポットライトの情報が
ご覧いただけます。
(英語サイト)

Contents	
2	追悼 美術館人としての高階秀爾先生 三浦 篤
ブロック報告 2024年4月～10月	
4	〔北海道〕地域コンテンツとしての展覧会 杉本 圭吾
6	〔東北〕切り拓かれた地平を耕して 田中 有沙子
8	〔関東〕アートの入り口と地域美術館の役割 岡村 春香
10	〔東京〕「欠落」を集める 佐原 しおり
12	〔北信越〕新幹線開業と地方美術館の役割 原田 礼帆
14	〔東海〕近代美術の顕彰 高曽 由子
16	〔近畿〕地域の文化に根ざして 深谷 聡
18	〔中国〕地域の美術や歴史文化を守り伝えていくこと 角野 広海
20	〔四国〕地方の美術館としてできること、すべきこと 品川 ちひろ
22	〔九州〕さまざまな場で光る地元作家の仕事 佐々木 玄太郎
部会報告	
24	—— 保存研究部会 邊牟木 尚美、小川 絢子
25	—— 教育普及研究部会 鈴村 麻里子
26	—— 情報・資料研究部会 川口 雅子
27	—— 小規模館研究部会 笹川 修一
28	—— 美術館運営研究部会 安田 篤生
29	—— 地域美術研究部会 重松 知美
いろいろ変えない難しさ 吉武 裕之(進和テック株式会社) 30	
賛助会員各社 31	
事務局から 32	
専門委員会から 33	
投稿要領 35	
ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 36	
編集後記 37	

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.27 2025年2月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

〔編集〕(一社)全国美術館会議 広報委員会 〔助成〕(公財)石橋財団

〔発行者〕(一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

〔デザイン〕宮谷 一孝 〔印刷〕日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

美術館人としての高階秀爾先生

三浦 篤（みうら あつし・大原美術館）

高階秀爾先生（私にとっては恩師なのでこう呼ばせていただく）が昨年10月17日に逝去され、いまだに喪失感の只中にいる。我々は戦後日本の美術界、美術史学界を牽引した偉大な人物を失ってしまった。と同時に、日本にとってかけがえのない文化人を失ったとの思いもまた募るばかりである。

しかし、忘れてはならないのは、高階先生が美術館人でもあったという紛うことなき事実である。先生は東京大学で教鞭を取られる前は、国立西洋美術館で主任研究官として勤務され、東大を退官された後、再び国立西洋美術館にて館長として活躍された。その後は倉敷の大原美術館でやはり館長として長く指揮を執られ、2024年春から大原芸術研究所長に就任されていた。その矢先の訃報であった。そして、先生の軌跡からすぐにわかるのは、大学で過ごされた期間のほぼ倍に当たる期間を美術館で過ごされたという点にほかならない。高階先生は確かに美術館に密接に寄り添った方であった。

昨年7月に大原美術館館長職を引き継いでから、大原美術館での先生の活動を初めて具体的に知ることになったが、それは私の予想をはるかに超えるものであった。むろん、1992年から2000年まで、先生が館長を務められた時代の国立西洋美術館では実に多彩な展覧会が開催されていた。ルネサンスから近代までの西洋美術が主たる対象となったのは当然であるが、それ以外にも美術の東西交流、短歌と美術の共鳴などをテーマとする展覧会は、広い視野をお持ちの先生らしいと思った記憶もある。しかしながら、2002年から2023年まで20年以上勤められた大原美術館で推進された活動は、国立西洋美術館のときとはまったく異なる性格のものであった。

よく知られているように、大原美術館のコレクションは大原孫三郎の支援の下に、画家児島虎次郎が1920年前後に収集した西洋美術作品がその礎を成している。エル・グレコの《受胎告知》やモネの《睡蓮》など「泰西名画」の常設展示だけで、十分入場者が期待できる美術館であった。しかし、高階前館長は着任時にまず、「自館の作品と歴史をちゃんと調べる。しまえばなし、出しっぱなしをやめる」ことを指示されたという。大原美術館のコレクションと歴史を改めて調査



チルドレンズ・アート・ミュージアム 開会前のセレモニー 2017年8月26日

し、作品を積極的に展示する基本方針を示されたわけで、それ以降、在任中に42ものコレクション・テーマ展が開催された。さらに、その成果を生かした大規模なコレクション展も何度か行われている。

他方、同時代美術に関わる事業も新たに始まった。大原家の旧別邸有隣荘を現代アートとからめて特別公開したのも、若手作家支援として滞在制作事業を推進したのも、VOCA展に大原美術館賞を出し続けたのも、すべて高階館長の指揮によるものであった。常に最先端のアートと並走する美術館でありたいという思いが込められていた。また、大原美術館が注力している教育普及、鑑賞支援事業で目を惹くのは「チルドレンズ・アート・ミュージアム」であろう。子どもたちを美術館という場に巻き込むイベントで、開館前に多数のスタッフとともに館長自ら「エイエイオー！」と氣勢を揚げる澆刺としたお姿は、大学人としての先生しか知らない者の度肝を抜いた。先生は確かに美術館人としての現場感覚をお持ちだったのである。

全国美術館会議でも高階先生は重要な役割を果たされ、2002年から2024年春まで理事、その間、2003年から2012年まで企画委員長を務められた。理事会でも積極的に発言され、研究部会を統括する企画委員長として新しいアイデアや提言を発せられ、機関誌『ZENBI』の生みの親の一人でもあったと聞く。そのご遺志を継ぐという意味でも、我々は全美の活動をさらに充実したものにしていかねばならない。

戦後から今日にいたるまで長らく日本の美術館のために尽力された、高階秀爾先生のご冥福を心よりお祈り申し上げる次第である。合掌。

地域コンテンツとしての展覧会

杉本 圭吾（すぎもと けいご・神田日勝記念美術館）



世界で猛威を振るったコロナ禍は、展覧会の企画・立案にも新たな取り組みの必要性を突き付けた。移動が憚られる中では国内外の著名な美術館からの作品借用が難しい、殊北海道においても、本州の美術館から借用した展覧会が企画しにくいために、自館ないし近隣館のコレクションを積極的に生かすことの重要性が増したのだ。

他方、美術館を取り巻く状況でもう一つ特筆すべきは、2022年の博物館法改正で、博物館の文化観光推進が努力義務化されたことであろう。近年の観光動向を見ると、アニメ等の舞台となった実在の場所を観光するコンテンツツーリズムが流行して久しいが、美術館で言えば、『刀剣乱舞』¹に登場する日本刀の所蔵館にファンが大挙して訪れた事例が挙げられよう。

しかし、コンテンツと地域のかかわりはアニメに限った話ではない。地域コンテンツとは「特定地域にまつわるあらゆるものを表象するすべてのもの」²を指す。この定義に則れば、地方美術館それ自体、そして所蔵作品さえも地域コンテンツとなる。コロナ禍以降の状況を鑑みつつ、今回は「地域コンテンツ」という視点から北海道の展覧会を紹介していこう。

北海道立旭川美術館で開催された「日本の洋画百五十年の輝き」展（7月6日～9月1日）は、国内外の優れた作品を地域に紹介するという趣旨で開かれた、笠間日動美術館の所蔵品展である。一方で本展では、日本洋画黎明期の代表的な具象画との比較や、作家との影響関係を紐解く参考展示

として、旭川ゆかりの上野山清貢、秋田義一の作品が、それぞれ高橋由一《鮭図》、萬鉄五郎《裸婦》と対比する形で出品されていた。他館の所蔵品を通じて日本洋画史を総覧できる展覧会、という形で地域住民に還元しつつ、地元作家にも目を向けさせる意欲的な試みであった。

札幌市の北海道立近代美術館で開催された「皇居三の丸尚蔵館展 皇室の至宝 北海道ゆかりの名品」（9月21日～10月27日）は、皇室に代々伝わる美術工芸品を収蔵する皇居三の丸尚蔵館の所蔵品展である。「北海道ゆかりの名品」と謳われたとおり、皇室と北海道との繋がりを紹介しつつ、北海道から皇室へ渡った献上品・買上品の里帰りという内容になっていた。里帰り品には北海道の風物を伝える美術、北海道の特産を生かした工芸もあり、皇室に伝わる優品を間近で鑑賞できるという訴求力を持ちつつ、改めて北海道という地域を強く想起させる展覧会だった。

夕張市にかつて存在した夕張市美術館は、2012年の積雪による屋根の崩落が原因で閉館した。2020年に「夕張市拠点複合施設りすた」が建設されたことを機に、市内で保管されている旧所蔵品を公開する展覧会が開かれており、昨年8月3日～15日に「旧夕張市美術館収蔵作品展 2024 先生からの贈りもの」が開催された。今回は没後35年を記念し木下勘二の作品に焦点が当てられていたが、例年、元市民が帰省するお盆に合わせて開催されており、基本的には市民・元市民を対象

とする。会場は図書館、行政窓口、バス待合所などの多機能型の施設ゆえ、温湿度等の作品管理の問題により短期間の展示にせざるを得ない条件があるが、このような形で旧所蔵品を展示し続けることで、郷土の誇りとして美術館やコレクションがあるのだと市内外に訴えるかのようだった。

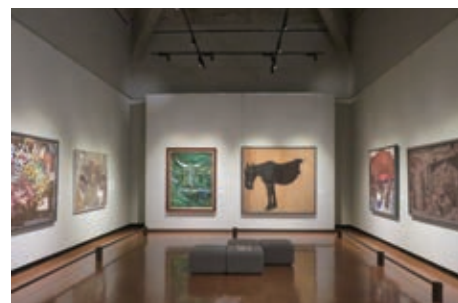
北網圏北見文化センターは美術館、博物館、科学館、プラネタリウムからなる施設で、美術館と博物館の併設のみならず、プラネタリウムが同一館内にあるのは全国的にも珍しい。北見市は文化サークルや同好会、大学の天文部による天体観測会が盛んで、その中心となるプラネタリウム自体、そして天文に関する活動自体が北見の地域コンテンツとなっている。今夏はイラストレーター、映像作家、写真家として活動するKAGAYAの作品展「天空の贈り物 ―KAGAYA 星空アート展―」（7月13日～8月25日）が開催された。彼の手掛けたプラネタリウム作品全てが毎日上映されていたことも壮観だが、会場では画業初期のデジタルアートも多く展示されていた。作家とプラネタリウム、天体観測会との縁が紡いで実現した展示内容とのことで、内発的発展型の企画と言える。

終わりに筆者の所属館である神田日勝記念美術館の事例を紹介したい。当館では一昨年度、50余年前の展覧会の再現を試みる企画展³をおこな

い、十勝地方の美術の悉皆調査を踏まえた戦後の十勝美術史の様相を展覧した。今年は視点を十勝から釧路・道東全体へ広げ、釧路市立美術館との所蔵品交換展「コレクションが出会う道東（ばしょ）」（6月26日～9月16日）を開催した⁴。筆者が釧路側へ声を掛け実現した展覧会であり、互いのコレクションの交換を通じて、自館のコレクションの理解を深める試みであった。

当館は神田日勝という画家を顕彰する個人美術館であり、鹿追町が運営する地方美術館である。ドラマの影響もあるが、開館から30年を経て、いまや神田日勝そのものが鹿追・十勝・道東を代表する地域コンテンツとなった。他方、館のこれを見据えると、特需や招致に依拠しない企画——コレクションをどう「魅」せるのかを探求することが肝要であろう。その補助線として「地域コンテンツ」という視座がヒントになるのではないかと考えている。

- 1 正式名称は『刀剣乱舞 -ONLINE-』。EXNOAが2015年から提供する、日本刀を擬人化した美男子キャラクターを育成して敵を討伐するゲームで、多くの（主に女性の）プレイヤーを擁する。
- 2 近藤周吾「〈地域×アニメ〉を論じる前に——『同床異夢』から『異床同夢』へ」、地域コンテンツ研究会（編）『地域×アニメ——コンテンツツーリズムからの展開』、成山堂書店、2019年4月、19頁。
- 3 「よみがえる全十勝美術展」（神田日勝記念美術館、2023年6月7日～8月6日）。
- 4 なお本展より先、4月27日～6月16日には釧路市立美術館にて同名の展覧会が開催された。



神田日勝記念美術館「コレクションが出会う道東」展 会場風景



北網圏北見文化センター「天空の贈り物 ―KAGAYA 星空アート展―」展 会場風景 北網圏北見文化センター提供

切り拓かれた地平を耕して

田中 有沙子 (たなか あさこ・郡山市立美術館)



筆者の勤務する郡山市立美術館では、市制施行 100 周年に合わせ、「フロンティア精神のひとびと」と題する一角を常設展示室に設けた。郡山市は明治 12 年着工の国営事業・安積疏水開削によって発展したまちであり、今日の人々にも開拓者としての気概が受け継がれている。明治期に洋画という新ジャンルに取り組んだ画家たちや、郡山市出身で戦後のガラス工芸界を牽引した佐藤潤四郎など「開拓者」と称すべき作家を紹介している。今年 7 月に逝去された郡山市出身の作曲家、湯浅譲二氏の展覧会を 2007 年に開催したが、当時展示された楽譜なども並ぶ。展示室に立つと、筆者はその歴史のおよそ 3 分の 1 しか知らないが、今年 32 年目になる当館のコレクションの特色と市立の美術館として担ってきた役割について考えさせられた。

美術館がその土地に存在するということを強く打ち立てた展覧会が今期は多く開かれたように思われる。青森では、青森県立美術館、青森公立大学国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館の 5 館が 2020 年から連携しており、「AOMORI GOKAN アートフェス 2024 つらなりのはらっぱ」(4 月 13 日～9 月 1 日) が開催され、各館が青森ゆかりの作家や土地に関連した展示を行った。国内外のアーティスト、さらには来館者と共同で作り上げる展示や、5 館を巡回する音楽イベントなどもあり、青森を舞台に多様な企画が繰り広げられた。

宮城県気仙沼市のリアス・アーク美術館の開館

30 周年記念展「デザインってなんだ？」(9 月 18 日～10 月 27 日) は、地元高校生を中心メンバーとしたワークショップが企画を進めてきたもの。地元の人々に馴染み深いデザインを通して当圏域の地域性や歴史、産業などについて考察することをねらいとしている。商品ラベルなどの同館収蔵作品や現在のグラフィックデザイン等が展示室を賑わせ、デザイナーが解説をしたり、トークイベントやコラボ企画をしたりと、デザインを多角的に学び、楽しめる内容であった。

今年開館 60 周年を迎える山形美術館では、山形県鶴岡市生まれの精神科医高橋龍太郎氏の現代美術コレクションによる展覧会「カンヴァスの同伴者たち 高橋龍太郎コレクション」(4 月 5 日～5 月 26 日) が開催された。同館は地元的美術団体や公募展の活動の舞台になるとともに、山形、日本、さらに東洋の美術、そしてフランス近代美術の名品を有し、地域の重要な美術の拠点であり続けている。同時代のアートを見つめてきたコレクターの眼を強く意識させる本展覧会は、開館以来の活動に一本筋を通すような意義深いものと感じた。本展覧会が一つのマイルストーンとなって、60 年の歴史へのまなざしがより一層深みを帯びるように思われる。

コレクターの活動に焦点を当てた展覧会では、福島県磐梯山の麓に立つ諸橋近代美術館の「コレクション・ストーリー ― 諸橋近代美術館のあゆみ ―」展(9 月 21 日～11 月 10 日) も挙げられる。創

設者の諸橋延蔵氏の作品収集歴を振り返りながら、ほぼ収集順に作品を配し、美術館の建設・開館までのエピソードを紹介することで、諸橋氏の想いに強い共感呼び起こす構成になっていた。地域の人に優れた美術作品を鑑賞する機会を提供したいという創設者の志からこの地に美術館が設立され、その熱意を引き継いでコレクションをさらに充実させつつ 25 年間の活動を展開してきたことが示されていた。

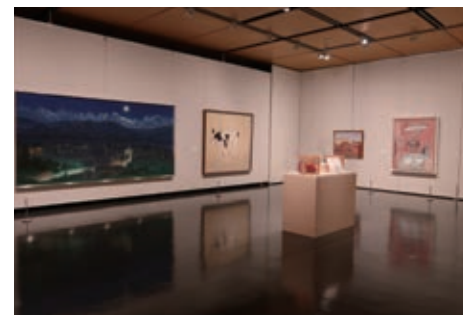
最後に、美術館の活動を包括的に展示した福島県立美術館開館 40 周年記念展「みんなの福島県立美術館 その歩みとこれから」(8 月 3 日～9 月 16 日) を紹介したい。美術館が開館するまでの経緯を基本構想報告書や新聞記事から詳細にたどり、建築図面や模型の展示から美術館のコンセプトを伝えていた。また、作品修復などの保存業務が鮮明にわかる写真パネルや、教育普及教材「アートキューブ」、展示作業で使用する資材や組み立て式タワーの実物展示などで、必然的に解説文が多くなる展示内容に変化がつけられていたように思

う。収集方針を明示しながら主要な所蔵品が展示されており、展覧会をきっかけに作品の収蔵に及んだ例や、県ゆかりのコレクターからの協力など、調査研究の成果として展覧会とコレクションの収集が連綿とつながり、館の歴史を築いてきたことが丁寧に紡がれていた。

寡聞にして見逃していた展覧会も多々あるであろうことをお許しいただきたい。それぞれの美術館が開館当初に打ち立てたコンセプトに加えて、長い歴史の中で美術館が帯びた独自の色があるだろう。地域との連携を見出し、そして近隣の美術館同士が刺激しあいながら、どのように色味を深め、質感を豊かにしていくことができるのか。これまでに先達の学芸員から継承されてきた作品・資料、そして知識の膨大な蓄積を整理して新たに発信する段階に来ている。美術館の役割が問い直される今、築き上げてきた歴史を地域とともに振り返り、有機的につながるような展覧会が望まれているように感じている。



郡山市立美術館常設展示「フロンティア精神のひとびと」会場風景



福島県立美術館 福島県立美術館開館 40 周年記念展「みんなの福島県立美術館 その歩みとこれから」会場風景
福島県立美術館提供

アートの入り口と地域美術館の役割

岡村 春香 (おかむら はるか・川口市立アートギャラリー・アトリア)



コロナパンデミックが明け、日本各地で地域をあげての芸術祭やアートフェアが再び増加傾向にある。より人々の生活や暮らしに近い様々な形で美術に触れやすくなったと言えるかもしれない。歴史ある博物館や美術館でも、人気アニメや人気アイドルグループとコラボレーションをすることは珍しくなくなり、アートのエンターテインメント化が顕著になるなど、これまで「難しい」「敷居が高い」といった人々のイメージを越え、より多くの人に利用してもらうために美術の業界も模索し、自らアップデートをしようとしている傾向がみてとれる。

こうした今までにないこと、変化していくことの重要性を認識する一方で、公立の美術館では自館のコレクションを最大限に活用したり、地域の美術を改めて紐解き、地域ゆかりの作家の顕彰をしたりという役割に、その存在意義を確かに感じているところでもある。

特に、神奈川県立近代美術館（4月20日～6月30日）と埼玉県立近代美術館（7月13日～9月23日）の2館で開催した「吉田克朗展—ものに、風景に、世界に触れる」は、吉田克朗没後25年の今年、作家の全貌に迫る初めての回顧展で、とても意欲的なものだった。吉田克朗は、1960年代末のもの派の動向の中核作家の一人として語られることが多いが、もの派の活動は吉田の55年の生涯においてはほんの数年の期間であり、それは多くの足跡を残した作家の断片に過ぎない。この展覧会では、もの派の作品を再制作し、その後

の版画、「転写」などの実験的な手法で制作した平面作品や、「触」シリーズなどの絵画作品とともに、作品のコンセプトや思考過程が辿れる制作ノートなどの多くの資料を通して、吉田が生涯をかけて追求したものに迫るものだった。

もの派は、国際的にも高く評価されている動向なだけに、一作家にとってはどうしても代表的な活動や代表作のみで紹介されることが多くなってしまふ。この回顧展ではこれまでほとんど知られることのなかった作品や資料を通して、改めて個展というものの素晴らしさ、そして地域ゆかりの作家を顕彰し再評価していく重要性を認識する機会となった。展覧会の図録は、1,000点を越える資料を収録するもので、研究機関としての美術館の活動自体がもっと評価されて良いとさえ感じる。

また、展覧会期間中は、作家本人を知る評論家や家族、学芸員などによるトークイベントが頻繁に、閉幕のその日も行われていたことは特筆すべきことである。神奈川県立近代美術館では、吉田克朗の技法を体験するワークショップ「きみも克朗！葉っぱをうつしとろう」(5月18日)が行われた。鑑賞だけでは難解であっても、体験に繋げることで利用者に五感を使って作品に近づくことのできる取り組みだった。

埼玉県立近代美術館での吉田克朗展の会期に合わせて、筆者の所属する川口市立アートギャラリー・アトリアでは、吉田克朗の長男であり現代美術作家として活動する吉田有紀の展覧会「吉田

有紀展—光の像（かたち）、おもちゃカラー」(8月22日～9月1日)を開催した。コロナ禍を経て生まれた《look for the silver lining》のインスタレーション作品を、5.5メートルの天井高の空間に展示。埼玉県立近代美術館副館長の平野到氏と作家との対談では、克朗と有紀の共通点として、純粋に美術を追求する制作への態度——平野氏の言葉を借りれば「自己表現ではない」——という提示があった。自館にとっては、近隣の美術館と連携事業を行えたことはとても大きな意義があり、今後も広く繋がりをもっていかれたらと思っている。

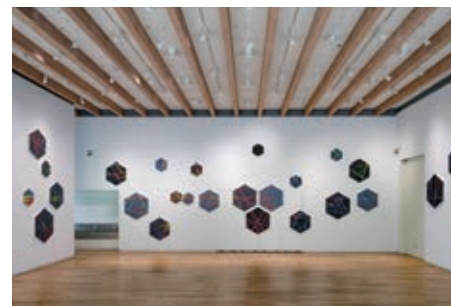
“アートの入り口”として感銘を受けた取り組みに、川越市立美術館の「タッチアートコーナー」がある。¹これは、展示室とは別の、美術館の一角に、無料のコーナーとして、ふだん美術あるいは美術館にあまりなじみのない方々が、気楽に美術に親しんでもらえるよう、どういう形なのか、どういう素材なのかを手で触って、鑑賞の第一歩となるよう作品を体験できるものだ。高田純嗣展(2023年12月21日～3月24日)では、鉄の造形作品が

並び、近隣の埼玉県立特別支援学校塙保一学園(旧埼玉県立盲学校)でもワークショップを行うなど、視覚障害者のアート体験にも長年取り組んでいる。

そのほかにも、横須賀美術館では触察図の開発やにおいて作品を伝えられるかなど試行されている。残念ながら2023年9月末で閉館したヴァンジ彫刻庭園美術館でも、彫刻作品に手でふれてみる取り組みが熱心に行われてきたことは記憶にとどめておきたい。

テクノロジーの進化とスピードの速さ、美術作品の形態や広報手段も日々変化し、美術施設を運営する者として正直、右往左往してしまうことも多いが、改めて地域館としての役割を自覚しながら、利用者の深い部分での経験となるよう、発信力を高め、地道に活動していきたい。

1 川越市立美術館 HP <https://www.city.kawagoe.saitama.jp/smph/artmuseum/josetsuten/fo-touch/fo-touch.html> より



川口市立アートギャラリー・アトリア
「吉田有紀展—光の像（かたち）、おもちゃカラー」会場風景



「欠落」を集める

佐原 しおり (さはら しおり・東京国立近代美術館)



昨今、全国各地の美術館で女性の作家の個展や特集が相次いでおり、日本でもようやく男性中心な美術史の見直しが進みはじめたのだと実感する。当館においても、コレクション展で「女性と抽象」(2023年9月20日～12月3日)、「フェミニズムと映像表現」(9月3日～12月22日)を開催するなど、女性の表現に焦点を当てた企画が増えてきている。一方で、創作活動において様々な制約を強いられ、歴史のなかで周縁化されていたのは、女性たちだけではない。社会的、政治的に困難な立場にありながら創作活動を行った人々の軌跡はそれぞれに固有の背景をもち、その一つひとつの事例を知ることでしか、問題の総体を想像することはできない。このような視点から、2024年の4月から10月に東京で開催された優れた実践をいくつか紹介したい。

練馬区立美術館で開催された「三島喜美代—未来への記憶」展(5月19日～7月7日)は、三島の初期の油彩作品から近作までを網羅した個展であった。現代の大量消費社会の副産物である印刷物やゴミを扱いながら、大胆かつ軽やかな手つきで作品を展開した三島の全貌をたどる展覧会であり、前年に岐阜県現代陶芸美術館で大規模な回顧展が開催されたものの、東日本の美術館としては初の個展となった。今後、国内外でのさらなる活躍が期待されるなか、会期中に91歳で逝去された。

「戦後の女性画家たち—有馬さとえ・朝倉摂・毛利眞美・小林喜巳子・招瑞娟—」展(実践女子

大学香雪記念資料館、7月1日～8月3日)では、同館で過去に個展を開催した有馬さとえ、朝倉摂に加えて、2023年度に新たに収蔵された3人の作家が紹介されていた。昨年評伝が出版され、再評価が進む毛利眞美、そして2022年に町田市立国際版画美術館で開催された「彫刻刀が刻む戦後日本—2つの民衆版画運動」展で注目を集めた小林喜巳子、招瑞娟の新収蔵作品の展示は、調査研究と展示、作品収集活動を並走させながら美術史を更新するという、理想的なあり方を体現するものであった。

「絵ごころでつながる—多磨全生園絵画の100年」展(国立ハンセン病資料館、3月2日～9月1日)は、国立のハンセン病療養所である多磨全生園の入所者たちの絵画活動を振り返る展覧会である。1943年に同園において「絵の会」が結成され、戦後にかけて活動の広がりを見せる様子を中心に、その軌跡が丁寧に紹介された。強制隔離政策や偏見差別によってハンセン病患者たちは様々な自由を奪われ、彼らの絵画活動には常に困難が伴っていた。展覧会では、制作そのものに活力を見出す描き手たちの個性だけではなく、個別の苦悩や、人生が映し出されていた。

かつて日本が植民地として支配した地域の人々もまた、美術教育から隔てられた存在といえるだろう。50年間に亘って日本統治下に置かれていた台湾には、当初美術専門の教育機関が存在せず、美術を学ぶためには日本を訪れる必要があった。東

京藝術大学大学美術館では、台湾出身者としてはじめて東京美術学校で学んだ彫刻家・黄土水の個展「黄土水とその時代—台湾初の洋風彫刻家と20世紀初頭の東京美術学校」(9月6日～10月20日)が開催され、高村光雲など黄土水が師事した作家たちの作品や、台湾出身の留学生の作品が紹介された。国宝、黄土水の《甘露水》を含む出品作は、彼の卓越した技術を伝えるとともに、日本で学んだ西洋彫刻の技術によって祖国の郷土色を打ち出すという、台湾の作家たちが置かれた状況の複雑さを示すものでもあった。

森美術館で開催された「MAM リサーチ 010: 1980～1990年代、台湾ビデオ・アートの黎明期(展覧会編)」(4月24日～9月1日)では、台湾との共同企画による詳細なリサーチの成果が示されていた。筑波大学大学院留学中に山口勝弘に学び、台湾のビデオ・アートの先駆者となった郭挹芬など、

代表的な作家の作品やアーカイブ映像が並んだ。日本からの解放後も、台湾は二・二八事件に続き、厳しい言論統制が敷かれた「白色テロ」の時代を経験していた。台湾の作家たちは、1980年代に入ってもなお「日本で」学ばなければならなかったのだ。1970年代に遡る日本のビデオ・アートとの時代的、政治的な隔たりは、台日の作家たちが見てきた景色の違いを物語っている。

このような昨今の事例は、インターセクショナルな存在が抱える不均衡を是正する社会的な大きな流れと軌を一にしている。一方で、「欠落」するピースを探し、埋めながら歴史を更新する行為は、美術史における普遍的な態度でもある。

美術館という限りあるリソースの中で、個々の実践の検証を進める活動を息の長いものにしていく必要があるだろう。一つひとつの試みに敬意と発見を見出しつつ、今後の長い道のりを思う。



国立ハンセン病資料館 企画展「絵ごころでつながる—多磨全生園絵画の100年」会場風景 写真提供: 国立ハンセン病資料館(東京)



森美術館「MAM リサーチ 010: 1980～1990年代、台湾ビデオ・アートの黎明期(展覧会編)」会場風景 撮影: 古川裕也 写真提供: 森美術館(東京)

新幹線開業と地方美術館の役割

原田 礼帆（はらだ あやほ・福井県立美術館）



2024年の福井は何といっても北陸新幹線の延伸に沸き立った。3月16日に金沢から敦賀間の各駅が開業し、福井駅からは東京まで乗り換え無しで最短2時間51分で行けるようになった。新幹線開業により、沿線にある北信越ブロックの各館への行き来は格段に向上した。今後、更なる交流促進と、京都、大阪への早期開通を願っている。

福井では新幹線開業記念を謳った展覧会が相次いだ。新幹線を利用した来館者も増加傾向にあり、一定の効果が得られていると実感している。今後の課題は、これを一時の打ち上げ花火にするのではなく、持続していくことではあるのだが、具体的に考えると悩ましい。

では、当県以外の北信越ブロックの各館に目を向ける。筆者の確認しうる範囲では、特に新幹線を冠につけた活動は行われていなかったように思われる。展覧会としては、各地域で作家の周年記念展が多く開催された。

一部挙げると、高岡市美術館で開催された高岡市美術館開館30周年記念展「生誕140年 竹久夢二のすべて 画家は詩人でデザイナー」（3月15日～5月6日）、長野県立美術館で開催された「生誕150年池上秀畝 高精細画人」展（5月25日～6月30日）、富山県水墨美術館で開催された「没後100年・富岡鉄斎」展（7月12日～9月4日）、石川県立美術館で開催された「生誕130年 武井武雄展～幻想の世界へようこそ～」（9月7日～10月6日）、松本市美術館で開催された「生

誕150年／没後70年 金工の巨匠 香取秀真展」（10月12日～12月1日）。これは今後の開催であるが富山県美術館で開催予定の「没後20年 東野芳明と戦後美術」（2025年1月25日～4月6日）など。

池上秀畝、香取秀真、武井武雄といった多ジャンルに渡る作家と縁の深い長野県の文化土壌の深さを改めて知ると共に、周年を一つの節目として地元ゆかりの作家顕彰を継続して続けていく重要さを再認識する展覧会の数々であった。

もう一人、長野県出身の作家として忘れることができないのは、菱田春草である。2024年は生誕150周年にあたり、出身地にある飯田市美術館において菱田春草生誕150年記念特別展「創造の道筋―画卷《四季山水》への歩み―」（10月5日～11月4日）が開催され、当館の例で恐縮だが福井県立美術館では北陸新幹線福井・敦賀開業企画「生誕150年記念 菱田春草展 不朽の名作《落葉》誕生秘話」（9月15日～11月4日）を開催した。

飯田市美術館は春草唯一の画卷《四季山水》に着目し、小下絵、大下絵、本画を並べて展示することで、一つの作品を生み出すにあたっての制作過程をつぶさに追うというもの。《四季山水》に至るまでに制作した作品の要素が至る所に活かされていることが明かされ、制作年代に対する新見も発表されたことで、春草研究を次なる段階へと進める課題

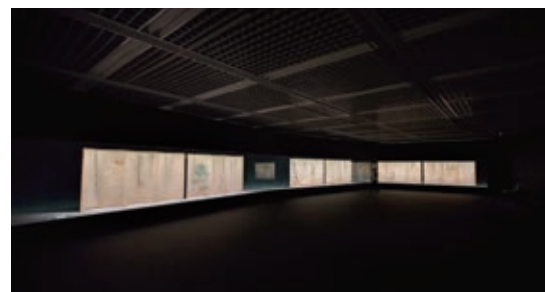
を提供した。この他、画業初期から晩年にかけての写生や下絵を通して、春草が何を学び何を考えて絵画制作を行ったのかを詳細に分析し、菱田春草という画家の絵画への向き合い方を新たな角度から浮かび上がらせていた。春草の人生に寄り添った構成は、出身地ならではの愛にあふれた展示であったように思う。

打って変わって当館では、春草の大作のうち《落葉》を主題に据えた。これは《落葉》と題した屏風5連作の最後の1点を当館が所蔵しており、かつこの作品は当館の購入第1号作品であったためである。重要文化財を含む《落葉》5作品を愛知県美術館以来21年振りに一堂に展示するべく、《落葉》のみを展示する「落葉ルーム」を造作し、一度に見比べることの可能な空間演出を試みた。更に《落葉》誕生の裏側を読み解くべく、春草の画業を代表作によって通観すると共に、同時代の洋画、日本画、そして春草が学んだ古画を併せて展示し、代々木時代の写生なども紹介した。県外からの来館者が多かったので、新幹線の冠に対しある程度の役割

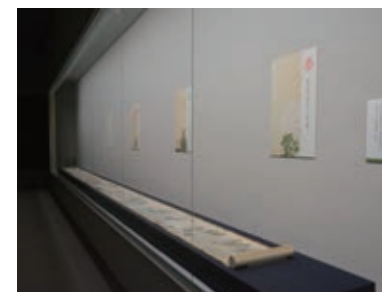
を果たしていると良いのだが。

同じ作家を取り上げつつも、異なる切り口で春草の画業を捉えた二つの展覧会によって、1館だけでは紹介し尽くすことが難しい作家のあらゆる側面を補完し合い、更にそれぞれの美術館の特色を発揮することができたと考えている。

また、どちらの展覧会にも展示された春草ゆかりの写生や資料は、春草のご遺族により継承されてきたものが、今年度、飯田市美術館に寄贈となった資料群である。令和に入り、近現代作家の関係者や所蔵家の代替わり、美術館側の担当者の異動、退職などにより、これまでの関係性が変化していく中で、残された資料の保存と調査は喫緊の課題である。周年展を定期的に行うことを通じて、こういった資料の精査が不断に行われ、館内における継承が円滑に進むことが期待される。地元根拠した地方美術館として、地元ゆかりの作家の顕彰と観光的要請は両輪である。必ずしも一致しないこれらの活動のバランスを保っていく難しさヒントを各館に学ぶことができた年であった。



福井県立美術館 北陸新幹線福井・敦賀開業企画「生誕150年記念 菱田春草展 不朽の名作《落葉》誕生秘話」会場風景「落葉ルーム」の一部



飯田市美術館 菱田春草生誕150年記念特別展「創造の道筋―画卷《四季山水》への歩み―」会場風景 画像提供：飯田市美術館

近代美術の顕彰

高曾 由子 (こうそ ゆうこ・三重県立美術館)



2024 年は白日会や春陽会、槐樹社、信濃橋洋画研究所、三科の創立など、近代美術にとって重要な出来事が相次いだ 1924 年からちょうど 100 年となる。これに関連してか、東海ブロックでは近代美術を振り返り、再検討する意欲的な展覧会が続いた。

碧南市藤井達吉現代美術館で開催された「春陽会誕生 100 年 それぞれの闘い 岸田劉生、中川一政から岡鹿之助へ」展(5 月 25 日～7 月 7 日)は会の結成 100 年を記念した展覧会。「各人主義」という言葉通り作品は実に多彩であったが、近代美術史の重要作家がそろっていることに驚かされる。このような場におけるゆるやかな連帯こそが美術発展の礎をなしていたことが、まざまざと感じられた。筆者が勤務する三重県立美術館では『『シュルレアリスム宣言』100 年 シュルレアリスムと日本』展(4 月 27 日～6 月 30 日)を開催。なるべく多くの作家をとりあげるとの方針のもと、地方や戦後までの広がりやまで目を向ける構成であった。各地でのシュルレアリスム作家研究の進展と蓄積をふんだんに盛り込み、単純な影響関係にとどまらない、多様な受容のありようが明らかにされた。

郷土の作家をとりあげたものでは、静岡市美術館「没後 35 周年記念 平野富山展—平櫛田中と歩んだ彩色木彫、追求の軌跡」(6 月 6 日～7 月 15 日)が静岡市出身の作家の大規模回顧展。人形から官展彫刻、平櫛田中の彫刻彩色と多様な作品が並ぶが、彩色や装束表現の手法には共通点も

見え、ファインアートの場合では排除された人形や分業が、その実近代彫刻の歩みを支えていたことを実感させる。会場では市内に点在する富山作品のマップも配布され、丹念な調査の成果を存分に楽しむことができた。名古屋市美術館で開催された「生誕 130 年記念 北川民次展—メキシコから日本へ」(6 月 29 日～9 月 8 日)は、各章に設けられたテーマから作家の生涯を追う構成。メキシコ時代の絵画から瀬戸の壁画、絵本の仕事までが網羅され、重厚な画面に込められた社会批判は、現代にも色あせない鋭さをはらんでいる。同時期には瀬戸市美術館にて「北川民次と久保貞次郎—真岡市コレクションを中心に—」(8 月 3 日～9 月 29 日)も開催。こちらは久保貞次郎と協働して出版した絵本や、版画の仕事にクローズアップしたもので、子供や人々の生活に向けられた作家のあたたかいまなざしを感じられた。

この夏は他館のコレクションの巡回展も目立った。碧南市藤井達吉現代美術館の「松本竣介『街』と昭和モダン—糖業協会と大川美術館のコレクションによる—」展(7 月 20 日～9 月 8 日)、一宮市三岸節子記念美術館の「奥田元宋・小由女 ふたりの美術館」展(7 月 13 日～9 月 1 日)がこれにあたる。出開帳型の展覧会であるが、近代洋画や女性作家は各館が継続的に取り組んできたジャンルであり、見ごたえのある構成であった。近年の資材費、輸送費、人件費の高騰は目にするたび暗澹とした気持ちになるが、コレクションを活用した

意欲的な展覧会に励まされる。

最後に、美術館外に目を向けたい。三重県内では近年美術館外での展示活動の活性化が著しい。長年地域美術を支えてきた画廊に加え、この数年ほどの間に新しいスペースやプロジェクトが増え、盛り上がりを見せている。

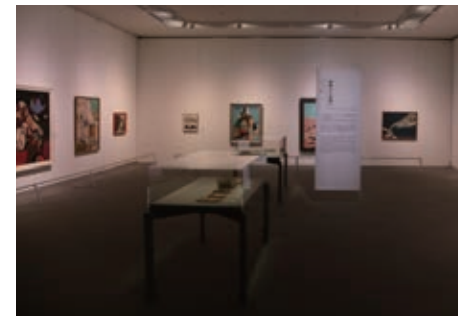
2021 年から始まった津市久居アルスプラザによるレジデンス事業「HISAI 芸術家の住む町プロジェクト 2024 成果発表展」(7 月 13 日～27 日)では、本年 O33 が久居地域の調査からインスタレーションを構成した。伊勢市では 2020 年に実施したクリエイター招聘事業から派生させ、「伊勢市クリエイターズエキシビション」と題した展示、イベントを継続させているほか、鳥羽市立海の博物館では女子美術大学の学生・教員が市内の海女と協働して制作を行う「鳥羽ストーリーズ・アート・プロジェクト」が第 3 回目を迎えた。いずれもアーティストが地域の観光資源の新たな魅力を発掘することに

期待を寄せるもの。アーティストはわれわれの生活を他者として眺める「来客」という立場が与えられ、現状当地ではアートが身近なものではないという現実をも感じてしまう。しかし、県内でアートを目にする機会が増え、その力に大きな期待が寄せられていることは純粹にうれしく、今後の展開が楽しみである。

建築家・大室佑介が 2016 年に津市に開いた私立大室美術館では、津市在住の金光男、宮田雪乃による「再生活」展(5 月 18 日～26 日)が開催された。「再生」「生活」「再・生活」をかけたタイトルの通り、そこには生活者としての作家が身近な風景の中に発見した違和が、やや不穏な空気を伴いつつ象徴的に表現されていた。美術館横の庭では近隣の人々が集ってくつろぐ姿も見え、生活に融けこんだ展示のありようが清らかな輝きを放って見えた。



静岡市美術館「没後 35 周年記念 平野富山展—平櫛田中と歩んだ彩色木彫、追求の軌跡」会場風景



三重県立美術館「『シュルレアリスム宣言』100 年 シュルレアリスムと日本」展会場風景

地域の文化に根ざして

深谷 聡 (ふかや さとし・奈良県立美術館)



2024 年春から秋までの近畿ブロックは、インバウンド効果と万博を見越した大規模展の開催、大規模なリニューアルの動きが大阪を中心に目立つ一方で、各地域の美術館の特色あるコレクションや地域に根ざしたテーマも印象的であった。迫る万博の開催に期待の一方、開催地となる近畿では輸送・展示をはじめとした開催にかかる費用の増大、スケジュールなど現実的な問題に喫緊の課題として直面している館も多いと思われる。その分、自館のコレクションや地域に根ざした美術館運営の重要性もまた高まっていると感じた。

まずは筆者の勤務地である奈良から、奈良県立美術館で開催した「小川晴暘と飛鳥園 100 年の旅」展(4 月 20 日～6 月 23 日)は、姫路市立美術館(7 月 6 日～9 月 1 日)、その後半蔵門ミュージアム(東京)・パラミタミュージアム(三重)へと巡回している。姫路に生まれ、奈良で現在も活動する仏像専門の写真館「飛鳥園」を創業した晴暘と二代目・光三親子を中心に紹介し、晴暘の手による全長 10 メートルを超える中国・雲岡石窟のスケッチなど、写真にとどまらない文化財の記録と表現について取り上げた。

奈良国立博物館では「空海 KŪKAI—密教のルーツとマンダラ世界」展(4 月 13 日～6 月 9 日)を開催。修理後の初公開となる国宝《両界曼荼羅》をはじめ、展示室内に立体的な密教空間を作り出していた。海のルートによる密教伝来という視点で紹介されたインドネシア・ジャワ島東部の遺跡出土

の《金剛界曼荼羅彫像群》(インドネシア国立中央博物館蔵)では他と趣の異なる円形の展示空間が印象的であった。インドネシアからの作品の輸送にあたっては、輸送に耐えられない状態の作品の修理を現地の技術者と共同で行ったとこのことで、修理技術の交流という点での意義も大きいと感じた。

大阪中之島美術館の「開創 1150 年記念 醍醐寺 国宝展」(6 月 15 日～8 月 25 日)もまた、会期を通して国宝 14 件、重要文化財 47 件を含む約 90 件を展示する大規模なものであった。ポップな展覧会ビジュアルや、初音ミクとのコラボ、「デジタル曼荼羅アート&ミュージックライブ」など、仏教美術ならではの重厚さと現代の展覧会としての間口の広さのバランスに工夫がみられ、仏教美術をカジュアルに楽しんでもらおうという意欲が感じられた。こうした仏教美術は知名度から忘れがちであるが、大規模展であると同時に、地域と密接に関わったテーマでもあり、関西の文化の層の厚さを改めて考えさせられた。

他にも大阪では約 2 年間の改修工事を終えた大阪市立東洋陶磁美術館で「シン・東洋陶磁—MOCO コレクション」(4 月 12 日～9 月 29 日)を開催。コレクションの陶磁器作品を写真家・六田知弘氏の写真と共に展示していて新鮮であった。同館の特長でもある自然採光展示や、回転台展示も装いを新たにしていた。

先に紹介した大阪中之島美術館で醍醐寺展と同時期に開催された「没後 30 年 木下佳通代」展(5

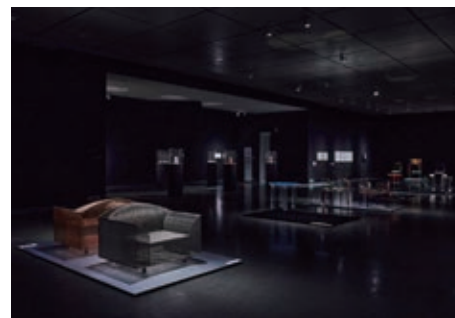
月 25 日～8 月 18 日)は、国内美術館では初の大規模な個展であり、作家の様々な変遷する表現手法を網羅しつつ、通底する「存在」への深い関心をテーマに設定し、作家の生涯を通観する個展ならではの構成で展示室内の作品は堂々たる佇まいであった。生前に地域の美術界で知られながら、没後に顧みられる機会の少なかった作家の歩みを紹介する、地方の周縁的な作家の紹介ということでも非常に印象的であった。

ところで、万博ではデザイン方面でも様々な話題を振りまいているが、京都国立近代美術館で開催された「印刷/版画/グラフィックデザインの断層 1957-1979」展(5 月 30 日～8 月 25 日)は、印刷、版画、グラフィックデザインという、隣接しながらも領域ごとに取り上げられることの多かった内容を、「東京国際版画ビエンナーレ展」を舞台に、当時の気鋭のデザイナーや版画家の活発な活動を振り返りつつ、今日的な意義を検証する内容の濃いもので

あった。会期の重なる「倉俣史朗のデザイナー記憶のなかの小宇宙」展(6 月 11 日～8 月 18 日)と合わせて、デザイン領域が特に社会の状況とも密接に関わっているという点で、時代的背景を強く帯びつつ、作品に宿る創造性には時間を超えた魅力があると改めて感じさせる内容であった。

芦屋市立美術館「創立 100 周年記念 信濃橋洋画研究所—大阪にひとつ美術の花が咲く—」展(6 月 22 日～8 月 25 日)、滋賀県立美術館「滋賀の家展」(7 月 13 日～9 月 23 日)といった展覧会も、地域に根ざした企画として、企画を考える側としても大変参考になった。

あらためて今回の機会をいただいて振り返ると、個性豊かな文化的背景と都市規模をもった関西で、その個性が美術館の活動としても独自に躍進していくのを見てみたいという思いが強くなった。小稿はそれに相反してブロック内でも更に限られたご紹介となってしまった点、ご容赦いただきたい。



京都国立近代美術館「倉俣史朗のデザイナー」展 会場風景(撮影:清忠之)



京都国立近代美術館「グラフィックデザインの断層」展 会場風景(撮影:守屋友樹)

地域の美術や歴史文化を 守り伝えていくこと

角野 広海 (すみの ひろみ・島根県立石見美術館)



地域の美術館には、地域の美術や歴史文化を守り伝えていくという役割がある。今回はその観点から、中国ブロックの動向について、本稿筆者が観覧した展覧会に限って紹介したい。

まず、中国地域に伝来した作品や文化財を紹介する展覧会がいくつか開催された。島根県立美術館での「畠山記念館名品展―松平不味ゆかりの逸品と琳派―」(4月19日～6月10日)は、施設改築工事で長期休館していた現・荏原 畠山美術館の所蔵品を活用しつつ、松江藩主で大名茶人の松平不味の旧蔵品も紹介された。浜田市立石正美術館での「石本正 祈りのかたち展―浜田の財(たから)とともに―2」(9月14日～11月24日)では、浜田市三隅町出身の石本正の仏教に対する知見も踏まえつつ、浜田市内の仏教美術の文化財3点が合わせて展示された。東広島市立美術館での「東広島市制施行50周年記念 日本刀の美―大山住宗重と広島ゆかりの刀剣」展(10月15日～12月1日)では、東広島ゆかりの刀鍛冶である大山住宗重の刀剣が一堂に展示されるとともに、広島県内外の刀剣も広く紹介された。島根県立石見美術館での「中世益田と美術」展(10月30日～11月25日)では、益田家伝来品をはじめ、中世の益田地域の一端を物語る古文書や美術工芸品が並んだ。

中国地域出身もしくは中国地域を拠点として活動していた近代画家の個展も開催された。

山口県立美術館での「没後50年 香月泰男のシベリア・シリーズ」(7月4日～8月25日)、岡山県立美術館での「没後80年 波多野華涯―筆と生きた女性」(7月13日～8月25日)、島根県立美術館での「落合朗風 明朗美術連盟と目指した世界」展(9月20日～11月4日)、広島県立美術館での「近代日本画の真髄 児玉希望―千変万化、驚異の筆力展」(10月4日～12月1日)では、いずれも一人の作家を中心に、その画業や時代背景、地域との関連性への考察もなされた。

近代画家だけではなくデザイン、絵本、漫画など他の分野についても、中国地域に関わる展覧会が数多く開催された。島根県立美術館での「『アンアン』『ポパイ』のデザイン 新谷雅弘の仕事」(6月28日～9月2日)は、島根県隠岐郡在住のデザイナーである新谷雅弘の仕事が事細かに紹介された。呉市立美術館『夕風の街 桜の国』誕生20周年記念 こうの史代漫画原画展―街から国へ、そして世界へ―(7月13日～9月8日)では、広島市出身の漫画家・こうの史代による「原爆」をテーマにした漫画『夕風の街 桜の国』の原画が展示された。東広島市美術館での「東広島市制施行50周年記念 第36回現代絵本作家原画展 よこみちけいこ一日々のたからもの」(7月30日～9月29日)では、呉市在住の絵本・紙芝居作家、よこみちけいこの作品が幅広く紹介されるとともに、展

覧会のために新たに書き下ろした作品や、作家と東広島市子どもたちとのコラボレーション展示など、展覧会を契機として地域との相互連携がなされた。島根県立石見美術館での「描く人、安彦良和」展(9月21日～12月2日)では、古代出雲に着想を得た漫画作品も展示されるとともに、古代出雲に関わる独自の関連プ

ログラムも実施された。また、同館では「石見生まれのメカデザイナー 山根公利」展(9月14日～12月2日)が、安彦良和展と同時期に開催された。

以上が、地域の美術や歴史文化を守り伝えていくという観点からみた中国ブロックの大きな動向である。



島根県立石見美術館「中世益田と美術」展 会場風景

地方の美術館として できること、すべきこと

品川 ちひろ（しながわ ちひろ・町立久万美術館）



筆者の所属する町立久万美術館のある久万高原町は、松山市中心部から高知市に向かって車で1時間の山の中に位置している。人口は約7,000人。昨年3月には開館35周年を迎えたが、かねてより館を支えてくれていた地域住民の高齢化が進む。さらに、若い世代の入館者数は伸び悩む。町内の子ども数は年々少なくなるばかり。そんな八方ふさがりの中、地域の美術館として存在することの意義とその難しさを痛感している。

地方の美術館として、地域住民のために何ができるのか。最近では地方と都市部の文化格差という話題を目にすることもしばしばだが、都市部と比べて選択肢の少ない地方において、美術館体験は貴重な意味を持つ。地域住民一とりわけ子どもたちに、幼い時から美術館に親しみを持ってもらうこと、美術ファン以外にも美術館に行きたいと思ってもらうこと、この2点の重要性を日々感じている。これらの視点を軸に、2024年上半期の四国ブロックの美術館活動について振り返ってみたい。

香川県立ミュージアムでは「特別展 皇居三の丸尚蔵館名品選『美が結ぶ皇室と香川』」（4月20日～5月26日）が開催された。メインビジュアルに伊藤若冲の作品を据えるなど、入り口はキャッチーでありながら、皇室と香川県及び四国のつながりの歴史を知ることができる、地域に目を向けた内容が印象に残った。また、琴平にある金刀比羅宮の襖絵なども展示されており、県内の文化の豊かさを実感させられた。

高知県立美術館では、「高知サマープロジェクト2024 Color Lab 色の実験室」（7月8日～9月14日）が開かれた。土地の自然物を手掛かりに、新たな絵具作りを行うという試みは、県民にとって自分たちの住む地域や暮らしを別の視点から見直す機会になったはずである。また、コレクション展で遭遇した一幕も印象に残った。県民と思われる来館者の「藤田嗣治の作品がここにあるなんて!」という、つぶやきが聞こえてきたのである。地域ゆかりの作家を顕彰するだけでなく、著名な作家の作品を地元で見られる機会があること。このこともまた、地方の美術館に求められていることのひとつなのだと改めて認識する出来事だった。

徳島県立近代美術館では、「特別展 大久保英治：辺境の作家 1973-2024」（7月13日～9月23日）が開催された。作家は、1998年から99年にかけて四国八十八カ所を歩いて多くの作品を制作するプロジェクトを実施しており、いわば「四国ゆかりの作家」。かつて、松山市内でも個展を開いている。実際に、当館来館者からも、「なじみ深い大久保さんの展覧会が徳島で開催されているのは興味深い」という声が聞かれた。短期的な試みではなく、長い目で一人の作家を追いかけることもまた、地域に根差した美術館として重要であると再確認した。

愛媛県では、今治市玉川近代美術館で「愛媛県美術館コレクションによるおでかけ美術館」を開催（8月3日～9月29日）。これは愛媛県美術館との共同企画で、両館の共通する

所蔵作家の作品を展示し、その魅力を広く楽しんでもらうことを目的としている。同じ県内といえども、公共交通機関の利便性は決して高いとは言えない。気軽に県美術館に足を運べない住民にとって、地元の美術館のコレクションを多角的に捉えることにつながるこのような試みは、大きな意味を持つだろう。地方での移動は、主に自家用車が想定されている。そのため、子どもや若者、高齢者など、自由な移動に困難を伴う層が数多く存在する。かくいう筆者もまた、自家用車がなく、県内はもとより、隣県への移動には毎回課題を抱えている。地方で美術に興味を持つことの困難を実感するとともに、だからこそ、そのきっかけを作ることの重要性を身をもって感じている。

最後に、当館の活動について紹介させていただきたい。9月14日から12月8日まで、「久万美の原点—洲之内徹」展を開催した。当館の設立のきっ

かけは、地元出身の実業家・井部栄治が、個人コレクションを町に寄贈したことに由来する。その多くは、美術評論家・洲之内徹が経営した現代画廊から購入されている。その縁から、現代画廊ゆかりの作品約70点がコレクター4氏から寄贈されることとなった。本展はそのお披露目展である。いわゆる「ビッグネーム」は含まれず、洲之内の知名度も低下している現在、本展は本稿で掲げた課題解決にはそぐわないかもしれない。それでも、実際に足を運んで、そこに美術館が「ある」ことの重要性を感じてもらえていたら何よりである。

ここまで、地方の美術館で働く身としてのとりとめもない実感を中心に、この上半期について記してきた。近隣や全国の美術館を参照しながら、人口7,000人のこの町で、美術館ができること、すべきことを引き続き考えていきたい。



町立久万美術館「久万美の原点—洲之内徹」展 会場風景

さまざまな場で光る地元作家の仕事

佐々木 玄太郎 (ささき げんたろう・福岡アジア美術館)

筆者の住む福岡市は2022年から「Fukuoka Art Next」を掲げて、同時代作家を支援するスペースの開設、福岡市で活動する作家を対象に作品の買い上げをもって表彰するアワードの実施、ウォールアートプロジェクトの展開など、さまざまな文化事業を推進している。「彩りにあふれたアートのまち」を目指すという一連の事業のなかでも目玉の一つとなっているのが、毎年秋に開催される「FaN Week」である。9月後半の2週間の間に、官民共同開催の大規模なアートフェア、市の美術館での企画展の数々、福岡城跡での特別展示やパフォーマンスイベントなど、各種の企画が集中的かつ華やかに展開される。福岡の美術館関係者も夏ごろ以降はそれに向けた仕込みと運営に追われることになる。そのように慌ただしい夏秋ではあるが、今シーズンは九州の複数地域で地元の同時代作家による印象的な展示をいくつか目にする事ができた。以下では主にそれらを紹介したい。

一つめは、対馬博物館の「泡ひとつよりうまれきし山内光枝展」(7月13日～9月23日)。対馬の海女集落である曲(まがり)に十数年通い続ける美術家の山内による展示である。しかし、一人の作家の作品のみが並ぶいわゆる「個展」とは少々趣が異なる。

本展で焦点が当たっているのは、曲において海とともに生きる／生きた人々の生のありようである。展示においては、曲の現役海女の原郷への旅を追った映像や、潮で描かれたドローイングといった山内の作品がもちろん重要な役割を果たしている。

しかし、決してそれだけが本展の主役ではない。会場には、曲の海女が実際に使用していた漁具(博物館所蔵)や、写真家の芳賀日出男による1960年代の海女たちの記録写真、海女を母にもつ曲の住民が制作した往年の海女船の模型などがともに並ぶ。展示を構成するこれらの要素は、いうなれば「非常に博物館らしい」ものである。一方で、来場者がそれら一つひとつの展示品に直接触れられるようにしてある点や、その促し方、背景の提示の仕方には、曲の人々の生き様に迫り、それと来場者ひとりひとりの生を繋ごうとする作家個人の「意志」と「表現」が確かに感じられ、多くの博物館で見られる客観性を重んじたニュートラルな展示とは一線を画する内容となっていた。

本展は「作家が提示しようとするもの」と「その見せ方」そして「博物館という場で行われる美術作家による展示」という企画の枠組も含めて、それぞれが有機的に噛み合って「生きた展示」をつくり上げており、美術作家と博物館という場それぞれの可能性の広がりを見る思いがした。

二つめは、鹿児島市立天文館図書館で開催された「かわるあいだの美術 2024〈物語る予感〉」展(9月29日～10月14日)。鹿児島のキュレーターと作家からなる民間グループ「かわるあいだの美術実行委員会」による企画で、しまうちみか、平川渚、山乃モトキら南九州の作家に、京都の谷澤紗和子を加えた計4名によるグループ展である。もともと図書館内に設定されている4つのエリアテーマ「そ

だつ」「くらす」「はたらく」「うみだす」に沿って作家たちが展示をおこない、「土地の固有性や現代社会の断層を、美術作品を起点に分野を往還しながら照射する」ことを目指した。

子供の読む物語や絵本を集めた「そだつ」のエリアには、南九州の民話にたびたび登場するというムカデを題材にしたインスタレーション作品を平川が展開。また、人々の暮らしにまつわる本を集めた「くらす」のエリアでは、地域の来訪神を追い続けているしまうちが、南九州各地の個性あふれる仮面の数々をスクラップ帳のような地図上に配置し、自作の面とともに展示。作家の制作物はいずれも、本棚の民俗誌的な書籍と自然なかたちで接続されている。

美術館の展示において、大量のテキストを読ませようとする作品を前に閉口してしまうことがしばしばあるが、図書館という場においては、言語ベースの作品やさまざまな民俗資料へとつながり・広がりをもつ作品も、非常に自然なものとして目に映り、作品と場が互いを生かす状況が生まれていた。

ここまで博物館、図書館での企画を紹介したが、最後に福岡県の大川市立清力美術館で開催された宮本華子の個展「在る家」(7月13日～8月25日)を取り上げたい。熊本県荒尾市出身の宮本は、家や家族をテーマに制作を続けてきた作家である。

本展では美術館をひとつの「家」と見立てて、多数の家具や日用品によって、洋館建築の同館全体を住居のような空間に仕立て上げた。そして家は、人が住むことで家となる。本展会期中、作家は毎日のほとんどの時間をこの「在る家」で過ごし、歯磨きや洗濯などもそこでおこない、来場者に「おかえり」「行ってらっしゃい」と声をかけ続けた。それによって会場には(少しだけ奇妙な)アットホームな雰囲気と日常感が漂っており、館内での経験は一つひとつの作品を「鑑賞する」というよりも、その場を「ともに過ごす」という感覚に近かった。

本展は、祖父母を見送った作家の近年の経験を背景にして構成されており、「老い」や「死」、「他者とのつながり」に関わる絵画や映像が作品として展示されていたが、作家の持ち味は何よりその会場全体の立ち上げ方に最もよく表れていたように思う。

以上、博物館、図書館、美術館という、少しずつ違った場における九州の同時代作家・企画者の試みの一端を紹介した。美術館のホワイトキューブ以外の場所で美術作品を展開することは現在においては決して珍しい試みではないものの、丁寧に組み上げられた上記の企画は、これからの美術作家の仕事や美術館のあり方を考える上でも、少なからぬヒントを与えてくれるものだった。



対馬博物館「泡ひとつよりうまれきし 山内光枝展」会場風景
撮影：山中慎太郎 (Qsyum!)



「かわるあいだの美術 2024〈物語る予感〉」展会場風景(しまうちみか展示風景)
撮影：Hanayuki Higashi

保存研究部会

邊牟木 尚美（へむき なおみ・国立西洋美術館）

小川 絢子（おがわ あやこ・国立国際美術館）

保存研究部会では毎年2回の会合を部会員の所属館で開催し、保存に関わる情報を学ぶ・共有する場を作っている。今年度1回目（通算59回目）会合は、2024年8月1日（木）～2日（金）の2日間、松本市美術館にて開催し、1日目は部会員25名、2日目午前には部会員24名（関係者含む）が参加した。

1日目は事務的な協議連絡と、バックヤード見学を行った。まず、昨年度から議論を継続してきた正会員以外からの入会希望への対応について協議を行った。これまでにメーリングリストや複数回の部会合を通じて挙げられた意見を踏まえ、各館のバックヤード事情など秘匿性の高い情報が扱われる部会であることを考慮し、部会への入会は正会員のみ可とし、個人会員及び賛助会員による入会希望はお断りすることとした（ただし、元部会員で退職後に個人会員へ移行した方は入会可とする）。

次に、多くの美術館で長らく美術品の燻蒸・殺虫処理に使用されてきたエキヒューム S® やブンガノン等の製造販売が今年度末で終了する旨の発表を受け、今後の各館での燻蒸方法や虫菌害対策について意見交換を行った。虫菌害対策にこれらのガスを使用している会員館は多く、製造販売終了が発表された際には部会員同士のメーリングリスト内でも情報交換が行われるなど、関心の高い内容であった。しかし本会合ではあまり時間が取れなかったこと、また、出席者が部会

員の半数以下であったため、今後アンケートで各館の対応を取りまとめて、次回の会合内で情報共有することとした。

その後、企画幹事の武藤美紀氏らのご案内で松本市美術館のバックヤード（展示倉庫、収蔵庫、トラックヤード、一時保管庫）を見学させていただいた。収蔵庫内は地震対策や簀子による通気対策が施され、作品の所在は作品管理システムと紐づけられており、整理の行き届いた様子を興味深く拝見した。

2日目は、講師として和泉田絢子氏（文化財防災センター・九州国立博物館研究員）をお招きし、「博物館の展示空間における空気汚染物質の管理と対策事例」についてご講演いただいた。特に展示ケースを使用した場合の空気汚染物質、それらの汚染物質に起因する作品の劣化事例、汚染物質の発生源とその調査方法・結果、美術館で行える対策事例についてお話しいただき、空気汚染物質は作品の劣化を促進するだけでなく、人間がシックハウス症候群になる原因でもあり、作品にも人間にも安全且つ適正な展示材料を選択せねばならないことを再認識する機会となった。

今後も、保存担当者が各館の運営に応用できる情報・知識を学ぶ・共有する場を皆で作っていききたい。なお、今年度第2回（第60回）会合は、2024年12月に岩手県立美術館での開催を予定している。



第59回会合（松本市美術館）協議



第59回会合（松本市美術館）施設見学



第59回会合（松本市美術館）講演会

教育普及 研究部会

鈴木 麻里子（すずむら まりこ・三重県立美術館）

前回の活動報告後、教育普及研究部会が企画を担った学芸員研修会と、対面形式の部会合が開催された。以下、それぞれについて簡単に報告する。

2024年3月7日と8日の2日間にわたり、国立新美術館において、学芸員研修会が開催された。研修会には全国美術館会議正会員館の職員、個人会員138名が参加。現在、研修会の運営メンバーが報告書の編集作業を進めているため、詳細は報告書に譲り、本稿においては概要のみ記載する。研修会テーマは「利用者を起点に考える〈展示・学び・アクセシビリティ〉」。当日は、「展示室の中で何が起きているのか？（分科会1）」「美術館における学びとは何か？（分科会2）」「アクセシビリティと美術館（分科会3）」というテーマを掲げた分科会に分かれ、それぞれに鷲田めろ氏、降旗千賀子氏（以上分科会1）、藤浩志氏（分科会2）、中村美亜氏、安曾潤子氏（以上分科会3）の5名の講師を招聘した。研修では、抽象的とも思われるテーマについて時間をかけて掘り下げ、迷ったり悩んだりしながら参加者が能動的に考えるプログラムづくりをめざした。参加者アンケートからは企画意図に賛同し、体験を前向きに受け止める声が多く聞かれた。研修会終了後の3月29日から4月30日には、鷲田氏、藤氏、中村氏による約2時間のプログラム「リレートーク」の

記録映像を、動画共有プラットフォームVimeoを通して全会員向けに配信した（全編字幕付き）。約1ヶ月間の公開であったが、視聴数は148回に上った。

また、9月3日から4日にかけて、2024年度1回目（通算第61回）となる部会合を開催した。会場は、コレクションを活かし、さまざまな主体と連携しながら地域に根ざした活動をつづける和歌山県立近代美術館。1日目は41名、2日目は39名（いずれもオブザーバー1名）が参加した。同館が2011年から継続するシリーズ「なつやすみの美術館」の会期中に、展示室内でのアクティビティをふんだんに含んだプログラムを開催した。参加者は、「なつやすみの美術館」のワークシートを使った鑑賞から、小学生対象の鑑賞ツアー、展示室内での展示解説、参加者同士のディスカッションに至るまで、多種多様なプログラムを体験。会合の終盤には、自館・自身の活動をふりかえる時間も設けた。参加者からは、改めて原点に立ち返る契機となった、自館のコレクションや資源を見直すきっかけとなった等の感想が寄せられている。会場館の青木加苗氏、宮本久宣氏、奥村一郎氏による計4本のスライドレクチャーについては記録映像を撮影し、部会員向けVimeo上で限定公開を行った（視聴数：11月17日現在27回）。



第38回学芸員研修会の様子



第61回部会合の様子

情報・資料 研究部会

川口 雅子（かわぐち まさこ・国立アートリサーチセンター）

本欄の前回報告で言及されていたとおり、情報・資料研究部会は2024年1月11日、国立アートリサーチセンター（以下「NCAR」）とのハイフレックス形式の合同会議を、第62回部会を兼ねる形で同センターにて実施した。

前段の合同会議では、NCARから、同センターが運営するリサーチポータル「アートプラットフォームジャパン」について、おもに「日本アーティスト事典」や全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」などを中心に紹介があった。また国立美術館の情報資源公開事業についても取り上げられ、「国立美術館サーチ（試験公開版）」をめぐる活動状況などが説明された。NCAR情報資源グループが進めているこれらの事業は、本研究部会の活動とも密接にかかわるものであり、部会員間で関連動向を共有する機会となった。

後段の部会合では、議題として『全国美術館会議会員館アーカイブズ資料所在一覧2022』が取り上げられ、今後の継続調査の実施可能性や調査結果の公開方法について意見交換が行われた。そのなかで、美術関係アーカイブズ資料の扱いに関するガイドライン・事例集の策定の可能性などについても積極的な意見が出た。

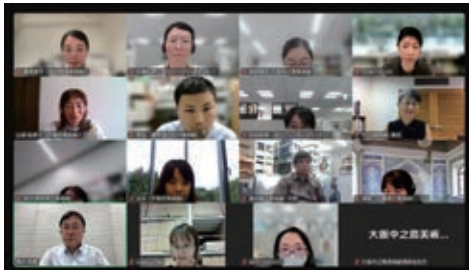
2024年度に入ってから、本研究部会が輪番制で担当する第39回学芸員研修会について企画検討を

本格化させており、2024年9月3日開催の第63回部会及び同年10月29日開催の第64回部会（いずれもオンライン）では研修会について活発な協議が行われた。施行2年目となる改正博物館法を踏まえ、第3条の博物館資料に係るデジタル記録の作成と公開がテーマとして取り上げられることとなり、本条文をめぐる、博物館で扱われる資料とは作品資料に限定されるものではなく展覧会記録や作家寄贈資料など多様であること、また公開に先立ち記録作成という段階があることは強調されてしかるべきであること、といったさまざまな観点が提起された。最終的にはこのうちの作品情報公開という、限定的な、しかし全国美術館において喫緊の課題と認識される重要な局面にフォーカスし構成することとなった。

研修会では、文化遺産オンライン（文化庁）・ジャパンサーチ（国立国会図書館）・全国美術館収蔵品サーチ「SHŪZŌ」（NCAR）といった各種プラットフォームとの連携に焦点を当てながら、国公立から私立までのさまざまな運営母体の美術館での実践例を取り上げる予定である。予算・人員は限られるなか、先頃条文化された情報公開という今日の課題に対して、各館はどのような工夫や取り組みを行っているのか？現場の学芸員にとって課題解決の一助となればと企画を練っているところである。



2024年1月11日 合同会議（国立アートリサーチセンター 会議室）



2024年9月3日 第63回部会合（オンライン開催）

小規模館 研究部会

笹川 修一（ささがわ しゅういち・小林古径記念美術館）

小規模館研究部会は全国各地から「当館こそが小規模」という美術館が数多く集まっている。設立の経緯や運営母体も様々であり、部会参加の動機も各々異なっているが、会合時には熱心な議論がなされており、部会参加を通じて共通認識や各々の課題解決へとつながられている。

小規模館研究部会は例年2回の会合に加えて研修会を1回実施している。当部会は主幹事が輪番制となっており、各年度の主幹事館を会場に毎年異なるテーマ設定によるケーススタディを中心とした研修を行っており、各館の実状や地域性が垣間見られる貴重な機会である。

第56回会合は、全国美術館会議社員総会の翌日の6月7日に弘前市立中央公民館で開催した。会合には加盟館16館、オブザーバー1館に事務局を加えた合計25名の出席があった。昨年度主幹事館の網谷幸二天空美術館から令和5年度の活動報告及び決算報告があり、続いて令和6年度からの退会館1館の報告と新規加盟館2館（大田区立龍子記念館及び入江泰吉記念奈良市写真美術館）の承認が行われ、小規模館研究部会加盟館は66館となった。次いで令和6年度の主幹事館と副幹事館の承認が行われた。主幹事館は小林古径記念美術館、副幹事館には有島記念館と入江泰吉記念奈良市写真美術館が行うこととなり、小林古径記念美術館か

ら令和6年度活動計画についての説明が行われた。

第57回会合及び研修会は、11月20日・21日に新潟県上越市の高田城址公園オーレンプラザで行われ、加盟館19館に事務局を加えて、28人の出席があった。20日には「コレクションと企画展」をテーマとした研修会が実施された。美術館にとって「収集」と「公開」は事業の根幹をなすものであり、あらためて作品収集と企画展の関係性について考えるというものである。今回は小林古径記念美術館、新潟県立近代美術館、雪梁舎美術館、北方文化博物館の4館の事例発表を行い、成り立ちや運営母体の異なる新潟県内の公立・私立の美術館・博物館からの発表を基に、参加各館と情報交換を行った。翌日の21日は第57回会合を開催し、次年度主幹事館となる有島記念館から提案された令和7年度事業計画案などについて検討した。会合の後、上越市内の美術館、博物館、文学館施設の視察研修を実施した。

当部会は令和7年度に全国美術館会議学芸員研修会を担当予定であり、研修会実施に向けて令和5年度から継続的に企画内容を検討している。部会の中から実行委員を選出し、実行委員での提案を基にして部会で協議しており、第56回及び第57回会合においても具体的な実施案作成に向けて検討を進めた。



第56回会合（弘前市立中央公民館）



第57回会合・研修会（高田城址公園オーレンプラザ）

美術館運営 研究部会

安田 篤生（やすだ あつお・高知県立美術館）

1年前、前回のこの欄を「私は現職を今年度末で退任予定であり、MRG 幹事として報告を書くのも今回が最後になるだろう。次の幹事となる方に期待しつつ、今回の報告を終わらせていただくことにする」などと格好よく締めくくったにもかかわらず、またもや懲りずに報告を書くことになった。捨てる神あれば拾う神あり、とはよく言ったもので、しかし「捨てる」も何も前職（奈良県立美術館）は予定通りの任期満了だったわけだが「拾う神」は高知県立美術館の藤田直義前館長である。そろそろ勇退したいから後任探し中ということだと思いがけず私に声がかかり、現役（＝全国美術館会議会員資格）続行となった次第である。

しかしながら、今年的美術館運営研究部会（以下「MRG」）は、メーリングリストでの意見交換は続いていたとはいえ、部会としての目立った活動は少ない（ひとつには幹事の私が転職・転居で慌ただしくしていたこともあるが）。そんな中で、年度としては昨年になるが、2024年1月15日に第37回MRG 部会会合を東京・国立新美術館で開き、2023年に実施した「学芸員聞き取り調査」の調査結果の公開・活用方法について協議を行った。

その結果の一つとして今年度になった6月、総会（弘前市）に先立つようにしてレポート「現場の声を聴く～学芸員聞き取り調査について」を全国美術館会議ウェブサイト¹に発表した。このレポートについては、機関誌『ZENBI／全美フォーラム』vol.26（2024年9月）誌上でも紹介したので、本誌読者の皆様はご存じのことと思う。同じく9月には、国立国会図書館のポータルサイト『カレントアウェアネス-E』から依頼を受け、そちらにも簡単な報告を掲載したことも付け加えておく。

さて、上記レポートの最後にも「手始めとしてこのレポートを発表する次第であり、今後、何らかの形で次なる議論や意見交換の場を作っていきたい」と書いたところであるのだが、その後の展開についてはMRG

内部で検討が進んでおらず、今後の宿題となっている。

MRGにとって長期的な宿題としてはもうひとつ、2017年に採択された「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」の改訂もある³。日本国内では博物館法の一部改正がすでに行われたが、現在ICOM（国際博物館会議）では博物館定義の改訂（2022年）に続いてICOM 倫理規程の改訂が進められており、順調にいけば2025年ドバイで開催予定のICOM大会で決まるものと思われる。それを受けて日本博物館協会の「博物館の原則と博物館関係者の行動規範」も改訂されることであろう。そのような内外の動きを見定めながらの長い道になりそうである。

最後に付け加えると、本号の全美フォーラムには、大島徹也氏（多摩美術大学美術館）が『全国美術館会議有志による「DIC 川村記念美術館の適正な存続を求める署名活動」』を報告する予定である。結果的にMRGの活動ではなかったが、MRGメンバーでもある3人（貝塚健、大島徹也、安田篤生）が呼びかけ人となった活動なので、触れさせていただくことにする。

¹ https://www.zenbi.jp/data_list.php?g=93&d=21

² <https://current.ndl.go.jp/e2728>

³ 行動指針の付則には「全国美術館会議は、5年ごとに、理事会及び総会において、この『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』の見直しを行い」「理事会は、その見直しの作業を美術館運営制度研究部会に委嘱することができる」と記している。



学芸員聞き取り調査について

地域美術 研究部会

重松 知美（しげまつ ともみ・北九州市立美術館）

地域美術研究部会は、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針及び目標のもと活動を行っている。部会合については、年2回のペースで全国の各ブロックを巡り、地域美術研究への理解を深める活動を行っている。

第16回会合は2024年2月21～22日、上田市立美術館と東御市梅野記念絵画館にて開催した。コロナ禍以降、活動時間を短縮してきたが、久しぶりに2日間の日程とした。2館にて開催された企画展「上田クロニクル（年代記）—上田・小県洋画史100年の系譜」を見学し、1日目は、企画された日向大季氏（東御市梅野記念絵画館）、小笠原正氏（上田市立美術館）に登壇いただいた。日向氏からは本企画展の主旨と、山本鼎が創立した農民美術研究所（1916年）から始まる上田市周辺美術運動の歴史について展覧会の流れに沿っての発表。続いて小笠原氏からは、山本鼎が上田で行った美術教育の精神が、市民による山本鼎記念館の設立運動、そして上田市立美術館（2014年開館）の運営方針など、地域の美術活動における精神的支柱として今日まで引き継がれていることが語られた。両氏の多角的な共同研究の成果が結実した企画展であった。2日目は東御市梅野記念絵画館にて佐野悠斗氏（同館）により同館の特色につ



第16回会合（上田市立美術館、東御市梅野記念絵画館）

いて解説いただいたのち、展覧会を見学した。

続く第17回会合は、同年6月7日に青森県立美術館にて開催し、池田亨氏（青森県立美術館）と奥脇嵩大氏（同館）に登壇いただいた。まず池田氏からは「芸術の青森展と青森県立美術館の取り組み」と題し、青森県の個性豊かな芸術文化を世界に向けて発信するというミッションに基づいた、地域に根差した活動方針と収集方針、その実践例としての開館5周年展「芸術の青森」についての発表。縄文土器から漆工芸、近代美術等ジャンルの枠にはまらない構成でありながらも、丹念な地域研究と青森の美術を発信するという一貫した姿勢により、独自の魅力にあふれていた。続いて奥脇氏より、2021～23年に開催されたアートプロジェクト「美術館堆肥化計画と堆肥化宣言展について」の演題で発表いただいた。美術館の役割を館外に求め、地域とアーティスト、美術館との相互交流によるプロジェクトは、これからの美術館が地域に対してどのような役割を成していけるのか、その一つの示唆を与えてくれる意欲的な企画である。続く質疑応答では活発な意見交換が行われた。

また、部会合の活動と並行して、当部会のこれまでの10年余にわたる活動を事例集としてまとめる企画を一昨年から検討している。現在、書籍化と2025年度末の発行を目指して進行中である。



第17回会合（青森県立美術館）

いろいろ変えない難しさ

静寂の中、凜とはりつめた空間にたたずむ美術品は、その作品だけではなく、その空間と共に見るものに対して美をうたえてきます。作品の造形美や色彩は見るものによって違いはあれども、文化財は私たちの共有の宝物に間違いはありません。そうした美術品・工芸品の中には、なかなか若い人たちの興味をそそるような派手さは無いものの、制作時の時代、作家の生い立ちを知ってゆくことで、理解が深まり、慈しみへとかわる経験をきっかけに、作品には没頭してしまう事があると思います。

古美術品や絵画は色あせてセピア色というのが一般的な感覚かもしれません。何が描かれているのだろうと想像しながら目を凝らしてみると、頭の中で色落ちした箇所や途切れた線を補正して、想像した絵画が出来上がっているかもしれません。そうした本物、実物の姿を追い求め、史実に間違いのない作品を残していく事は、美術館・博物館に係わる方々のたつての希望かと思えます。

ちょっと話が変わりますが、白い文明と言われる古代ギリシアのパルテノン神殿の柱の上には「エジプシャン・ブルー」という当時エジプトでしか採れない青顔料を使った彩色があった事が判明し、真っ白であったのは間違った見識であった事が知られています。とても美しい色彩豊かな建造物であった事を想像するとワクワクします。こうした、それまでの常識を覆すことの発見は、多くの関係者の頭をより悩ませ、マスコミを賑わせる事になるのでしょう。

現存している日本画も、水墨画もこれまで多くの

吉武 裕之（よしたけ ひろゆき・進和テック株式会社）

方々が興味を持ってご覧になってきた事かと思えます。国立博物館で若冲の緻密で色彩豊かな詳細画の展示会が長蛇の列になり、数時間の待ち時間が報じられた事もありました。こうした出来事の背景には、収蔵物をしっかりと保管され、原色の色合い・姿をそのままに宝物の価値を損なう事なく後世に伝えていくことに真摯に取り組み、シビアな空調管理に悩まれている学芸員様の存在があつてのことかと存じます。

さて、進和テックは空調機に使われるイオケミカルフィルター、東京文化財研究所様にご助言を賜り製品化した微細な活性炭を薄い不織布で挟んだシート状のイオケミシートを提供して館内の収蔵庫や展示室、展示ケースの酸性ガス、アルカリ性ガスを吸着して美術品の変色や腐食を防ぐためのご協力をさせていただいております。抗菌フィルターも揃え、特に専用の空気清浄機は高いガス吸着力で環境改善にお役立ていただけます。

酢酸濃度が落ち着かない収蔵庫で、設置後1週間で改善が認められ、そのままご利用いただいている事例もございます。保存・公開の使命感に悩まれている関係者の皆様のちょっとした処方箋になれば幸いです。

短期間では分からない変色に気づかないまま、いつの間にかオリジナルの価値が失われてゆくのは、私たちの宝物が失われてゆくという事になります。オリジナルの価値をそのままの姿で繋いでゆきたい思いです。

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

公益財団法人ポーラ美術振興財団〔公益財団法人〕	
公益財団法人鹿島美術財団〔公益財団法人〕 株式会社集英社〔出版業〕	
エア・ウォーター防災株式会社〔製造業〕 カトーレック株式会社〔一般貨物自動車運送業〕	
共同通信社〔通信社〕 光明理化学工業株式会社〔製造業〕	
株式会社高島屋〔小売業〕 株式会社 DNP アートコミュニケーションズ〔サービス業〕	
株式会社伏見工芸〔展示装飾業〕 ヤマト運輸株式会社〔美術品輸送〕 読売新聞東京本社〔新聞〕	
株式会社グッドフェローズ〔Web チケット販売、発券精算システム〕 株式会社水声社〔出版〕	
公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団〔公益財団法人〕 株式会社ユニークポジション〔情報サービス業〕	
株式会社レンブラント〔画塾〕	
アート印刷株式会社〔デザイン・印刷・出版業〕	株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ〔美術展企画等〕
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク〔展覧会企画制作〕	エヌ・アンド・エー株式会社〔アートコンサルティング〕
株式会社 NHK エデュケーションナル〔映像を中心とするコンテンツ制作〕	株式会社 NHK プロモーション〔展覧会等のイベントの企画・制作〕
株式会社加島美術〔美術商〕	株式会社ギャルリーためなが〔画塾〕
株式会社キュレイターズ〔企画・デザイン・コンサルタント〕	協同組合美術商交友会〔美術業界団体〕
株式会社熊平製作所〔製造業（収蔵庫設備・入退館ゲート）〕	株式会社クレヴィス〔展覧会企画・出版〕
株式会社広済堂ネクスト〔情報・印刷〕	金剛株式会社〔製造業（保管機器・銅製家具製造）〕
産経新聞社〔新聞、広告、出版〕	進和テック株式会社〔ガス対策機器販売〕
公益財団法人西洋美術振興財団〔公益財団法人〕	一般社団法人全国美術商連合会〔美術業界団体〕
大日本印刷株式会社〔総合印刷業〕	株式会社東京美術倶楽部〔貸会場等〕
株式会社トップアート鎌倉〔額縁額装・画材〕	中西出版株式会社〔図録・書籍の制作・出版〕
株式会社パレット〔文化財の保存修復用品 製造と販売〕	株式会社美術出版社〔出版事業〕
美術商社 盛林株式会社〔現代アートギャラリーの運営〕	本州四国連絡高速道路株式会社〔運輸業〕
有限会社丸栄堂〔美術商〕	株式会社メルコグループ〔資産管理〕
ライトアンドリヒト株式会社〔照明器具販売〕	株式会社ロココ〔情報通信業〕
早稲田システム開発株式会社〔ミュージアム向け IT サービス提供〕	
イカリ消毒株式会社〔サービス業〕 M & I アート株式会社〔美術商〕 東京新聞〔新聞業〕	
日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社〔印刷業〕 一般社団法人日本写真著作権協会〔一般社団法人〕	
株式会社丹青研究所〔サービス業（コンサルタント）〕 有限会社アート・フリース〔グッズ制作・販売〕 株式会社アートローグ〔コンサルティング業〕	
影山 幸一〔アートプランナー〕 株式会社 Gakken〔出版〕 株式会社求龍堂〔出版・デザイン業〕	
株式会社生活の友社「美術の窓」「アートコレクターズ」〔出版社〕 株式会社 TT トレーディング〔HOGOS〕	
トライベクトル株式会社〔翻訳サービス業〕 株式会社美術年鑑社「新美術新聞」〔出版業〕	

2024 年夏から秋へ

事務局長 山梨 俊夫 (やまなし としお)

本年度は6月6日に第4回社員総会が開かれましたが、それ以後今日まで専門委員会、各研究部会、能登半島地震被害や川崎市市民ミュージアムの水害に対する救援活動が、それぞれ怠りなく行われてきました。具体的な展開については、部会、専門委員会からの報告を通して確認できると思います。

何よりもまず、去る10月17日にご逝去された高階秀爾氏に深く哀悼の念を捧げます。氏のご活躍は、日本ばかりでなく海外にも大きく深く刻まれています。詳細にわたる経歴は本号で三浦篤氏が執筆されております。全国美術館会議（以下「全美」）での高階氏は、理事として、そして特に企画委員長の任に長く就かれ、各研究部会のとりまとめに穏やかで明快、適確な手腕を振るわれました。国内外の美術館事情に精通され、該博な知見をもって、全美の活動全般に眼を配られ、長年にわたって全美を辛夷適正な方向づけをされたご指導に、改めて深甚な感謝を申し上げます。

総会後からこの稿を書いている年末までに主だった課題としては二つの事項が挙げられます。まず、総会時に東京国立近代美術館の鈴木勝雄氏から提示された、指定美術品の展示期間について。もう一つは千葉県佐倉市のDIC川村記念美術館の将来問題です。

前者はいまのところ特段の進展をみていませんが、指定美術品の展示期間を通年で150日に限る決まりのうち、いままでは自館の展示日数を数えなかったのですが、今後がそれも算入するとの変更が文化庁から通知されました。これに対して全美としては異議を申し立てるのではなく、美術品の種別、展示環境の条件、通算照度の限度などについて、客観的に通用する基準を調査する必要があると考えられます。海外の美術館、国立文化財研究所、保存研究部会の専門

的意見を採取して、同研究部会で、果たして客観的基準が作成できるかを全美内で検討する必要がありますかと思われます。厄介なのは、文化庁が根拠としている150日は、かなり以前、文化庁から問いかけがあった際、国立美術館側から提示した日数で、科学的根拠が明らかではないということです。温湿度、照度についての国際的基準が現在どうなっているかなどを調査するには、時間がかかるかと思えますが、この問題の窓口になった事務局としては、同研究部会と協議していきたいと考えます。

後者のDIC川村記念美術館の件については、同美術館の運営母体でありDIC株式会社から、規模縮小、場所移転、美術館閉館の選択肢をもって、運営形態変更の計画が2024年半ばに発表されました。法人化されていない企業美術館であり、また検討段階であることもあって、全美として要望書などは提示しにくい、美術館運営研究部会の有志が中心となって、全美有志という形で署名を集めたうえで、美術館、特にコレクションの行く末についての希望期待を会社に伝える行動をいたしました。このことについては、実際の作業を貝塚健氏、大島徹也氏、安田篤生氏が担いましたので、その経過が大島氏から本号で報告されています。

最後に、事務局からのお願いです。現状を見渡すと、全美の活動について会員館職員の認知に、世代によって濃淡があることが懸念されます。美術館経験を積むと他館との情報交換、連携の機会が増え、その中で全美の役割について知ってもらえるのですが、若い世代のあいだでは比較的認知度が低い傾向があります。事務局としては、若い世代に積極的に研究部会活動に参加し、人的交流と情報交換の密度を高めていっていただき、全美の活動基盤がより確かなものになることを期待しております。

広報委員会から

広報委員会副委員長 尾崎 信一郎 (おさき しんいちろう・鳥取県立美術館)

前号に引き続き、全国美術館会議機関誌『ZENBI』を発行し、全国美術館会議のホームページを運営する広報委員会から若干の報告を行う。

前号で報告したとおり、今年度より委員長として大阪中之島美術館の菅谷富夫館長をお迎えして活動が続けている。今回は特段に報告すべき事項はないが、予定どおり『ZENBI』の発行を進めており、前回の26号では「全美フォーラム」に刊行以来最多となる8篇の投稿をいただいた。震災や各種会議の報告とともに、個人会員からの投稿が順調に増えていることを示すエピソードといえよう。今後も正会員、個人会員を問わず、多くの方から

の原稿をお待ちしている。なお、投稿については電子媒体を含めて未発表の内容であることを条件としている。本誌は半年に一度という間隔の空いた発行であることもあり、あらためて投稿の際の注意をお願いしたい。

ホームページに関しては個人会員・賛助会員の閲覧制限の緩和や、専門委員会の活動紹介の掲載など、現在検討中の案件がいくつかある。いずれも委員会内で調整し、必要に応じて理事会などにも諮ったうえで、次号で進捗をお伝えすることができる。

能登半島地震と文化財レスキュー活動

災害対策委員 濱崎 礼二 (はまさき れいじ・宮城県美術館)

2024年は、能登半島地震で明けた。1月1日16時10分に発生した地震は最大震度7、マグニチュード7.6を記録し、災害関連死も含む死者行方不明者465人、全壊家屋6,437棟、一部損壊等も含めると139,690棟にのぼっている。3つの断層が次々に破砕する今回のケースでは、熊本地震で10秒間揺れた震度7の揺れが能登では50秒間続き、その結果、熊本地震の4倍の家屋が倒壊したという。さらに、道路を含むライフラインは寸断され、輪島市や珠洲市では水道さえ出ない状況が5月までつづいた。このライフラインの損壊が、復旧に遅れをもたら

した。

このような事態のなか、1月1日17時過ぎには、全国美術館会議（以下「全美」）災害時連絡網北信越ブロックと東海ブロックはいち早く動きだし、翌2日には全美災害対策委員会に各館の被害の状況が報告された。その詳細については、機関誌『ZENBI』Vol.26の富山県美術館の以倉新氏の報告に詳しい。正月真つた当中での、全美各館の迅速な初動は高く評価される。翌3日には国立文化財機構文化財防災センターが今後の組織づくりと活動について、文化庁と協議を始めた。それを受けて、文化遺産防災ネッ

トワーク推進会議（以下「文防 NW」）の参画団体である全美は、1月10日に「能登半島地震の被災状況に関する美術館の被災状況についてのお知らせ」をHPに掲載し、全美として救援活動の可能性について告知した。そして1月25日、石川県より文化庁に対して救援要請が提出されたことを受け、2月7日、文防 NW の幹事会が開催され、幹事団体である全美も出席し、翌日「令和6年能登半島地震被災建造物復旧支援及び被災文化財等救援事業」が立ち上げられた。同時に全美に対しても救援活動への参加が依頼され、全美は「大災害時における援助活動実施要領」に基づき、事務局内に対策本部を設置した。つづいて2月13日、「第1回合同委員会」が石川県庁内で開かれ、事業の組織体制と活動の概要が発表され、27団体による大規模な文化財レスキュー事業が始まった。組織の立上げまでには約1ヶ月を要したが、そこには過去の文化財救援活動の経験と反省を踏まえ、系統だった組織づくりがその後の救援活動の進捗に影響することを配慮して慎重に進めた結果だった。

ようやく始まった救援活動ではあったが、レスキュー活動はけしてスムーズに進んだわけではない。まず、今回の震災がインフラに及ぼした壊滅的な打撃が、レスキュー活動に大きく立ちちはだかった。道路の寸断や道路上への倒壊家屋による通行制限によって、金沢市街からの日帰りの活動は困難になった。また、水道やガス等の破断によって宿泊場所の確保もままならず、活動できる参加者の受入れ人数も制限せざるをえなかった。加えて、活動場所でのトイレや休憩所の確保も困難を極めた。このような状況から、当初の活動は月曜日から金曜日までをワンクールとする長丁場の活動となった。このような中で、全美ではレスキュー参加者のコメントをメーリングリストで共有し、派遣登録の仕方や

現地のインフラ状況、作業内容など細かい情報を提供し、参加者の不安の払拭と活動への参加の呼びかけに役立てた。

また、気象観測以来最悪の猛暑の到来に、6月からは熱中症対策も必要になり、こまめな水分補給や休憩所の確保が厳しい被災地での活動をよりいっそう困難なものにした。

しかも暑く長い夏がようやく終わり、作業の進捗をはかれる秋が到来した矢先、今度は台風と大雨が追いつちをかけた。9月21日から22日にかけての「奥能登豪雨」では、水損被害を受けた文化財への対応が新たに生じた。近年の温暖化に伴う線状降水帯の頻発は、突然の水損被害への対応の難しさを我々に突きつけている。

1995年の阪神・淡路大震災以降、1998年の高知豪雨水害による高知県立美術館での水損被害、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震、2019年の東日本台風による川崎市市民ミュージアムの水損被害等があり、そして今回能登半島地震がおきた。近年、自然災害の発生はあきらかに増加している。その間、東日本大震災で被災した旧・石巻文化センター（現・石巻市博物館）の被災作品の修復が足かけ11年かけて2022年に終了した。しかし、川崎市市民ミュージアムの被災作品の修復は現在でもまだ続けられている。被災は一瞬だが、レスキューや修復には膨大な時間がかかる。レスキュー事業の最大の課題が、活動の継続である。まもなく能登半島地震の救援活動も2年目に入る。11月28日現在で救援依頼件数242件のうち145件のレスキューが完了した。厳しい環境下での数字としては、大いに評価すべきだと思う。このレスキュー活動に、全美からも延べ124名の学芸員たちが従事した。苛酷な条件下でのこの実績、全美の貢献度は大きい。それでも、能登も川崎もまだ終わらない。今後も会員館の協力が欠かせない。

『ZENBI』では、次の要領で 広く皆さんからの原稿をお待ちしています。

〔原稿の内容〕

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

〔投稿の資格〕

- ・全国美術館会議正会員の職員、個人会員、賛助会員の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

〔投稿に係る詳細〕

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

〔締切〕

- ・第28号（2025年9月発行予定）については4月30日、
第29号（2026年1月発行予定）に関しては10月31日を締切とします。（当日必着）

〔提出先〕

s-osaki@pref.tottori.lg.jp（尾崎）
ikedai@kanazawa21.jp（池田）
aoyama_k@nmao.go.jp（青山）

〔問い合わせ先〕

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒682-0816 鳥取県倉吉市駄経寺町 2-3-12
鳥取県立美術館
（一社）全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0858-24-5442

賛助会員、個人会員の皆さまへ

令和4年、ZENBI 全国美術館会議機関誌の投稿規定を改定しました。新しい投稿規定は次頁のとおりです。

vol.23より、「全美フォーラム」について、正会員の職員以外にも個人会員、賛助会員からの投稿を広く募ることといたします。多くの立場からの活発な投稿をお待ちしております。

同様に個人会員、賛助会員の皆さまへの特典強化の一環として、機関誌や全国美術館会議ホーム

ページでの賛助会員のご紹介を充実させていく予定です。まずは機関誌で vol.22 より業種の掲載を開始しました。

また、ホームページは現在正会員以外には閲覧制限がなされていますが、個人会員、賛助会員の方に対しては制限を緩和すべく、当委員会で準備を進めているところです。

今後一層のご支援、ご協力をお願いいたします。
広報委員会

ZENBI 全国美術館会議 機関誌 投稿規定

制定：平成 23 年 7 月 24 日
改正：令和 4 年 1 月 31 日
全国美術館会議広報委員会

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として下記に限る。
 - ア 全国美術館会議正会員が所属する館の職員
 - イ 全国美術館会議個人会員
 - ウ 全国美術館会議賛助会員の職員
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは（一社）全国美術館会議広報委員会（以下「広報委員会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。
- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は（一社）全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

編集後記

『ZENBI』の 27 号をお届けする。コロナ禍という美術館にとって未曾有の危機はひとまず終息したとはいえ、これと関係しているのであろうか無関係であろうか、輸送費から保険や会場工作費、展覧会にかかる諸経費は高騰するばかりである。おそらくはその反映であろう、近年の展覧会入場料の高騰ももはや看過しえない域に達しているように感じる。この問題については以前よりどなたかに論じていただきたいと考えている。このほか今回の「全美フォーラム」には美術館の存立についての問題提起も寄せられている。様々な意見があろうが、議論の場として今後も本誌が役立てば幸いである。

国立西洋美術館と大原美術館の館長を歴任され、理事としても長くお務めいただいた高階秀爾先生の訃報に際しては三浦館長から追悼

の文章をいただいたが、編集者の特権として若干の追想を披瀝することをお許しいただきたい。直接に教えを受けた訳ではないが、担当した展覧会や審査の仕事を通して高階先生とは何度となく仕事を御一緒する機会があった。京都で仕事をしていた折には先生の盟友とも呼ぶべき堂本尚郎先生の個展に際してテキストをお願いしたこともある。強く記憶に残るのは、堂本先生の葬儀の際に高階先生が原稿なしに実に感動的な長文の弔辞を手向けられたことである。一つの時代を画す才能の交流とはかくも美しいものであるのかと魂が揺さぶられる思いであった。高階先生には企画委員長としても全国美術館会議に多くの貢献をいただいた。あらためて感謝と追悼の思いを捧げたい。(O)

IPMを取り入れた保存環境づくりと 虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



公益財団法人 文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F
TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp

Study:大阪関西国際芸術祭

Study:Osaka Kansai International Art Festival 2025
2025.4.13 Sun — 2025.10.13 Mon

アート × ヒト × 社会の関係を Study する芸術祭

2025 年。北緯 34° 41' 11" 東経 135° 31' 12" — 大阪にアートという形をとった無数の疑問符が出現します。それは、私たちが当然としてきたあらゆる前提に（時には、考えること・口にするのを避けて来たテーマに）問いを投げかけるものです。「アートには何が可能か?」「何が不可能か?」— 疑問。思考。研究。調査。発見。驚嘆。発信。共有。2025 年の万博の年に誕生する集合知型アート体験。あなたも参加してください。そう。あなたが今、このメッセージを読んでいること。それ自体が、実は、巨大な作品の一部と言えるかもしれません。

第1弾 参加アーティストを発表

ロン・ミュエック、パトリシア・ビッチニーニ、マウリツィオ・カテラン、釜ヶ崎芸術大学ら、国内外から地元のアーティストまで幅広く参加。

会場に万博、天保山、船場・西成エリア他

大阪・関西万博会場内各所にパブリックアート作品の展示。万博会場外では、安藤忠雄建築の大阪文化館・天保山、黒川紀章建築の大阪国際会議場・中之島、西成、船場、JR 大阪駅エリアなど、大阪・関西地区の様々な場所で展覧会やアートフェア、アートプロジェクトを展開します。

サテライトプログラム「Co-Study」公募

全国から企画を募集し、一緒に（Co-）盛り上げるアート企画やイベントを募集します。本芸術祭と連携し芸術祭会期中に開催し、双方向で連動しながら情報発信の機会を提供します。

アートを楽しむ旅を提案する Web メディア

「Art Tourism」では、「美術館」「建築」「パブリックアート」「グルメ」「ホテル」の 5 つのテーマから、アートのスポットをご紹介します。掲載情報や、ご紹介をご希望の美術館様などがございましたら、ぜひお気軽にお問い合わせください。



Co-Study
公募詳細



Art Tourism
公式サイト



Study: 大阪関西国際芸術祭 Vol.1 Photo: Kohei Matsumura
"INTER-WORLD/SPHERE: Cocooner" OKUNAKA Akihito



"Our Sweet Home" 森村泰昌（美術家）× 坂下範征（元日雇い労働者、釜ヶ崎芸術大学在校生）



大阪文化館・天保山（旧サントリー・ミュージアム）



札幌を拠点に活躍する 9 名の現代アーティストと
北海道立近代美術館の 10 名の学芸員が、
複眼的視点で「北海道の美術」について再検証した
「星の瞬間 アーティストとミュージアムが読み直す『Hokkaido』展の公式図録」。
同館コレクション、アーティストの新作含む会場風景、
学芸員の論考 10 篇を収録。

2025年2月発売
A5版(21.0×14.8cm)、134頁、定価 2,530円

編集:北海道立近代美術館
企画協力:CAI現代芸術研究所/CAI03
書店、Amazonほか電子書籍も販売いたします。

NAKANISHI PUBLISHING CO., LTD.
中西出版株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL(011)785-0737 FAX(011)781-7516
URL: <https://nakanishi-shuppan.co.jp>
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp



AR'LOGUE



ぜんぶのいのちと、ワクワクする未来へ。
Towards a brighter future for all



芸術祭
詳細

Kumahira

www.kumahira.co.jp

空気質改善

ケース内の空気を循環
させるファンユニット

化学物質吸着フィルター

展示物に悪影響を与える酢酸
ガスやアンモニアを吸着。
ケース内における化学物質の
発生をなるべく少なくできる
よう、使用する素材にも配慮
しています。

調湿剤ボックス

調湿剤ボックスを通過するこ
とで、一定の湿度に保ちます。

収蔵庫内装にも

使用される調湿建材

キュアライトS

展示床面の調湿建材「キュア
ライトS」が湿度環境の安定化
をサポートします。

美しく守る技術

鑑賞性アップ

高透過ガラス・ 高演色LED照明

ガラスはフロートガラスと透
明度の高い高透過ガラスの
2種類からお選びいただけま
す。照明は標準仕様として調
光可能な高演色LEDを採用
し、さらに色温度の変更も可
能な調光調色仕様もご用意。
展示物をありのままに美しく
魅せます。

クマヒラミュージアムケース

ART CELLAR SERIES

アートセラーシリーズ

展示物を湿度や有害ガスから守り、鑑賞性を高める

株式会社クマヒラ 本社 〒103-8314 東京都中央区日本橋室町2-1-1 日本橋三井タワー14階 TEL.03-3270-4381
株式会社熊平製作所 〒734-8567 広島市南区宇品東2-1-42 TEL.082-251-2111

詳しくは
WEBへ



SHANGHAI, 1989

photo: 棚井文雄 / Fumio Tanai / 著作権者 ID: HJPI320610000334

人と物と場所とが重なる時間。

この街には、それらの歴史の交錯から現れる暖かい光、重い影の描くシーンがある。

棚井文雄の上海

日本写真著作権協会は、会員11団体の職業写真家を中心に著作権者IDを附番しています。
このIDにより著作権者を特定することができます。



一般社団法人 <https://jpca.gr.jp>

日本写真著作権協会

Japan Photographic Copyright Association
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCIIビル 403

【会員団体】 公益社団法人日本写真家協会
公益社団法人日本広告写真家協会
一般社団法人日本写真文化協会
日本肖像写真家協会
一般社団法人日本写真作家協会
全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会
一般社団法人日本自然科学写真協会
日本風景写真協会
公益社団法人日本写真協会
一般社団法人日本スポーツ写真協会

学芸員が現場で役立つ基礎と実践

博物館資料保存論

石崎武志・編著

A5・208頁・定価：2,640円（税込）

ISBN 978-4-06-537479-5

学芸員の資格取得をめざす人のためのコンパクトにまとめたスタンダードな教科書。文部科学省の要綱に準拠した構成で、中学理科や高校化学の復習と用語解説を充実させたフルカラーの改訂版。基礎から学びたい入門者に最適。

新刊

第2版



▶ 主な内容

- 第1章 博物館資料保存総論 文化財保護の歴史／文化財とは／文化財の材質／博物館資料の劣化の要因／屋外文化財の劣化の要因／文化財の保存に関する倫理
- 第2章 博物館資料の保存環境 温湿度環境／光と照明／室内空気汚染／生物被害／伝統的保存方法／博物館資料の被災防止と救援活動
- 第3章 資料の保全 資料の状態調査・現状把握／紙資料の修復・修理／資料の梱包と輸送
- 第4章 ひろがる博物館の役割 地域資源の保存と活用／ひろがる博物館の役割

2025年3月刊行予定

博物館教育論

黒澤 浩・編著

A5・予 176頁・予価：2,640円（税込）

ISBN 978-4-06-538013-7

博物館・美術館教育について理論と実践の両面で役立つポイントをコンパクトにまとめた。基礎理論とともに具体例を紹介するので効果的な実践方法がよくわかる。

第2版



▶ 主な内容

- 第1章 博物館教育の理論 博物館教育の特色／博物館教育の歩み／生涯学習としての博物館教育／博物館教育の実践に役立つ理論
- 第2章 博物館教育の方法 見ること・聞くことによる学び／身体と五感による学び／想像力と語りによる学び
- 第3章 連携する博物館 博物館と学校を結ぶ／研究のための連携／アウトリーチー博物館をつなぐ／連携の視点から
- 第4章 博物館教育にかかわる人材 ボランティア／エデュケーター／ファシリテーター／ミュージアム・コミュニケーター／後継者の育成ー博物館実習

2025年秋～2026年春に刊行予定

博物館概論

東京都文京区音羽 2-12-21
<https://www.kspub.co.jp/>



編集 03(3235)3701
販売 03(5395)5817

2025年3月刊行予定

博物館展示論

黒澤 浩・編著

A5・予 192頁・予価：2,750円（税込）

ISBN 978-4-06-538013-0

文部科学省の要綱に準拠した構成でコンパクトにまとめた。博物館・美術館展示の基本を学べるだけでなく、現場で活かせる実践的な技術も多数紹介。

第2版



▶ 主な内容

- 第1章 博物館展示総論 博物館における展示の役割／博物館展示の政治性・社会性／博物館展示の制約と限界／地域社会と向き合う展示
- 第2章 博物館展示の理論 日本における展示の歴史／展示の諸類型／博物館展示による癒やしー博物館浴／展示評価／博物館展示と関連法規
- 第3章 博物館展示の技術 展示のプロセス／動線計画／展示環境の管理／照明／展示ケース／展示グラフィック／レプリカとジオラマ／展示の解説システム／音声ガイドと多言語表記／人による展示解説／広報のためのデザイン／展示図録
- 第4章 博物館の評価
- 第5章 ユニバーサル・ミュージアム

教科書採用をご検討の方は講談社サイエンティフィックホームページ：教科書採用献本お申込みフォームにてお問い合わせください。



お申し込みフォーム

世界の名画を 安心・安全に

株式会社 ギャラリー ためなが

東京 〒104-0061 東京都中央区銀座 7-5-4
TEL 03-3573-5368

大阪 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-1 ホテルニューオータニ大阪 1階
TEL 06-6949-3434

京都 〒605-0991 京都市東山区上堀詰町 265-7
TEL 075-532-3001

パリ 18, Avenue Matignon, 75008 Paris
TEL 01-42-66-61-94

galerie taménaga
depuis 1969

WEB www.tamenaga.com
Email gal@tamenaga.com



美術品販売

近現代作家を中心とした多岐にわたるコレクションから、お客様のニーズに合った作品をご提案いたします

輸入代行

世界中の美術品が集結するパリ。50年以上かけて築き上げた現地のネットワークを活かし、作品の購入・輸入のお手続きを代行いたします

作品貸与

これまでに紹介してまいりました近代絵画から現在活躍中の所属作家まで、様々な作品の展覧会への貸し出しを承ります

時価査定

半世紀以上の経験から成る厳密かつ公正な評価で、コレクションの真価を明らかにいたします

よりそい、つよく、ささえる。

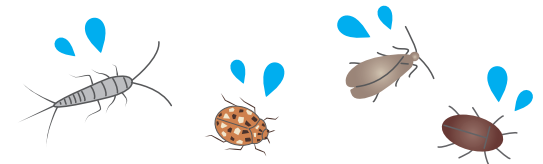
IKARI



エコミューアー FTプレート

文化財虫菌害
防除薬剤認定
第26号

イカリ消毒オリジナルの蒸散タイプの防虫剤。
人体への安全性が高く、少量で効果を発揮します。
効果はなが〜1年間。
迷惑な文化財害虫を撃退します。



イカリ消毒株式会社 <https://www.ikari.co.jp>

本社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL. 06-6636-2741 FAX. 06-6636-2720